



宇宙堂試演公演より

花
々
の
眠
る
部
屋

登場人物

山野 幸一

昭次（家族3・あざみ）

百合子（老婆）

萩原

土栗

なずな（家族2）

消防士（家族1・紫苑）

ききよう（客）

ポタン（老女）

昆虫（蝶・サナギ）

舞台とは別の場所で一人の少年がりんごをかじっている。
近くの立橋の上を列車が走っている。
少年、かじりながらその列車の行方を見守っているが、何かに目を奪われ、あ
つという間の百面相。
と、少年の兄、山野幸一が花キューピット便に乗せたバイクで通りかかる。
尋常ならざる格好の弟を発見し、幸一あわてて駆け寄るが、その世界になぜか
入り込めずにひとしきり観察する。

幸一 昭次……。

昭次 ……。

幸一 昭次、お前、学校は……。

昭次 ……兄ちゃん……。

幸一 学校行かなかったのか？

昭次 兄ちゃん！

幸一 なに興奮してんだよ。

昭次 ほんとうに兄ちゃんか？

幸一 ……。

昭次 良かった！

と、幸一をひしと抱きしめる。

幸一 気持ち悪い奴だな。

昭次 だって、兄ちゃんがここにいた！

幸一 配達行くんだよ。

昭次 良かった！もう会えないかと思ったよ。

幸一 変なやつだな。今朝も朝御飯一緒に食ったろう？明日もあさつても嫌でも食うんだよ。お前が大人になるまでは。

昭次 あの列車……ずいぶん遠くに行くみたいだ……。

幸一 ああ？

昭次 あの列車の窓の中に兄ちゃんがいたような気がしたんだ。そっくりだった……兄ちゃんかと思つて、ドキドキした。

幸一 こんなところから見えるはずないだろう？

昭次 見えたんだよ。さつき。もう帰らないって顔して兄ちゃんがおれに手を振った。

幸一 うらやましい奴だな、そいつ。

昭次 じゃあ、さつきのは、兄ちゃんの意識の投影かい？それともここにいるのが兄ちゃんのぬげがらなんだろうか。

幸一 学校休んで変な本ばかり読んでいるから、現実が見えなくなるんだ。次男はいいよなあ、思いつきり夢がみられてよ。

昭次

兄ちゃんだって無理して花屋つぐことないじゃないか。何だかんだ言っても父ちゃん、兄ちゃんには甘いんだから。

幸一

だからこそ期待を裏切れない長男の重みがあるんだよ。子供にや判らん。学校行けよ、何してんだよ、こんなところで。

昭次

りんご食ってた。

幸一

かっぱらったのか！

昭次

おれんだよ。毎日食わないと元気が出ないんだ。ほら、赤いだろ？

と、ポケットから出してまたかじる。

幸一

……。

昭次

兄ちゃん、りんごの花はあんなに真っ白なのに、どうしてこんな血みたいに赤い実がなるのかな？

幸一

……昭次……。

昭次

昔、兄ちゃん言ってたろ？りんごのヘソは外の世界を吸い込んでるって。吸い込まれた世界が丸い宇宙を作ってるんだって。この実の中には小人の国があるんだろうか？その中から見るとこの世界はどんな風に見えるのかなあ？この小さな入口はここを吸い込んでどうしようとしているの？

幸一

作り話だよ。赤ん坊だったお前を寝かしつけようとしただけだ。りんごの中にある

昭次　のは、甘くて白いくだもの肉ばかり。食べれば消える薄い記憶の風なんだ。
兄ちゃんの話、おもしろかったのに……。

幸一　おもしろいものは、決まって嘘なのさ。捨ててしまえ、そのりんご。

昭次　嫌だよ。

幸一　赤いりんごは秋のくだものなんだ。桜の季節に、ないりんごを思っ

昭次　あるだろう？あるよここに。

幸一　ないよ。兄ちゃんを心配させるなよ。

昭次　でも、毎日食べないと。

幸一　秋になったら山ほど買ってやる。

昭次　兄ちゃん、つまらん大人になったな。

幸一　配達行ってくる。学校行けよ！

と、バイクに乗って去る。

昭次、歌う。

昭次　へこんな闇夜の野原の中を行く時は

客車の窓はみんな水族館の窓になる。

乾いた電信柱の列が



2002年宇宙堂試演公演より
幸一（右）と昭次（中央）

せわしく映っているらしい。
汽車は銀河系の玲瓏レンズ
巨きな水素のりんごの中を駆けている。
りんごの中を走っている。
けれどもここはいつたいいこの停車場だ？

(宮澤賢治『青森挽歌』より)

ようやく舞台が見えてくる。

建ち並ぶビル。そのビルのスキマに頑固にボロツと建っている木こりの家。その部屋の中は、本当に童話に出てくる七人の小人の部屋のような古風な木造りである。

ドアをノックする音が響く。

声、聞こえる。

声
こんにちはわ！

と、再びノックする音。ドアが開き、花キューピット便を持った幸一がそろそろと現れる。

幸一 あれ？鍵開いてますよ。入りますよ。

と、中に入って辺りを見回す。

床の中央に穴が開き、季節はずれのききょうの花が一輪咲いている。

幸一、珍しそうにそれを観察する。

「本物だな……」と、床の下をのぞき込む。

と、奥より女が現われる。

女 ダメよ！

幸一 えっ？

女 とつちやダメ。

幸一 違いますよ。見ていただけですよ。

女 どうして？

幸一 珍しいなあと思つて。

女 どうして？

幸一 春なのに、ききょうが咲いているから。しかも、これ、この下の土からでしょ？この家の床、……どうしてこの……まさかこのききょう、床を突き破つて？違いますよね。たけのこなら判るんだが。

女 それ、珍しいのか……。

幸一 珍しいですよ。
女 ずっとあるから知らなかった。
幸一 ずっとつていつから。
女 ずっとずっとよ。忘れるくらい前から。うちじゃずっと咲いてるの。
幸一 あ、あのこれ……。

と、花キューピット便を差し出す。

女 えっ？
幸一 あ、花屋です。ここにハンコお願いします。
女 ハンコ？
幸一 あ、サインでもいいです。
女 サイン？
幸一 この家の人なんでしょう？
女 ええ、まあ……。
幸一 じゃ、お願いします。ここんとこ、ここ。

女、サインする。

幸一 あ、名字だけで良かったのに。百合子さんか……それで……。

と、カゴに盛られたカサブランカを見る。

おめでとうございます。

……。

誕生日じゃないんですか？

今日何日？

3日です。3月3日。あ、ヒナ祭りだ。それでかな……。

これ何？

だから、あなたにでしょ？百合子さんに、百合の花差し上げたいんじゃないんですか？

誰が？

誰がつて、ここに書いてある人でしょ？あれ？書いてないか……親父が電話受け取ったからな。びっくりさせようとしてたんだなきつと。恋人でしょ？あなたの。フフフ。

え？

恋人なんか……。

いないんですか？

幸一 女 幸一 女 幸一 女 幸一 女 幸一 女 幸一 女 幸一 女

女、ため息をつく。

幸一 おれ、いや私、失礼します……配達しにきたただけだから……。

と、外に出ようとする、部屋に入ろうとしていた初老の男と、ぶつかる。

男 なんだ、なんだ！

幸一 スミマセン、花屋です。

男 花屋がどうしてここに？

幸一 配達にきたんですよ、それ。

男 花キューピット便？なんで？

幸一 何でって言われても、そちらの方に聞いて下さいよ。

男 そちら？

と、二人振り向くと、百合子は消えている。

幸一 あれ？今、サインもらったんだけどな。

男 ええ？

幸一　じゃあ、失礼します。

男　……あああ！

幸一　何ですか？

男　これ何だよ、これ、これ、いやだなあ。

幸一　ええ？

男　変なのついたよ、黄色いのう！

幸一　ああ、花粉ですよ。これついたらなかなか取れないですよ。

男　いやだなあ……困るなあ……ウンチみたいじゃないかあ。

幸一　すみませんねえ。オシベ全部取ったつもりだったんですけど。ああ、持ってくる途中で、ひとつつぼみが咲いたんだ。取っておきますから。

と、取りながら、

幸一　また咲いたら、取って下さいよ。こうやって。

男　嫌だよ。僕は生まれつき黄色いものがダメなんだから。見るのもさわるのも嫌なんだ。

幸一　じゃ、そつとそつと、そのまま飾っておいて下さい。いい匂いだなあ……ここんところが、いい匂いを出すんです。

男　君、このつぼみが全部咲き切るまでここにいて、この黄色をつみ取ってくれないか

幸一 ね？
幸一 はあ？
幸一 僕がこの黄色を目にする前に、サツとね、サツと。
幸一 そんな、あと三つもありますものね。
幸一 いつまでかかる？あと三つ。
幸一 この感じだと、明日の朝までには……。
幸一 じゃあ、明日の朝まで、君、あ、君、名前は？
幸一 山野です。山野幸一。
幸一 山野君、これは君、花屋の義務なんじゃないかね。
幸一 そんな……そんな人いませんよ。花屋に配達したあとの花粉の処理を頼む人なんて。
幸一 君はキューピットなんだろう？
幸一 ええ？
幸一 ここに書いてあるじゃないか。キューピットしたら、天使なんだろう？天使が人の
幸一 悩みふやしてどうする。
幸一 しかし、仕事が……。
幸一 オシベ一本につき千円でどうかね？
幸一 (指を折って数えると一万八千円) やりましょう！
幸一 あ……。
幸一 えっ？

男 幸一 男 幸一 男 幸一 男 幸一 男 幸一 男 幸一 男 幸一 男 幸一 男 幸一 男 幸一

風だ……。

ほんとに……スキマ風ですかね。

ビルの谷間に吹く風さ。ここだけは平屋だからね。屋根の上をピューピュー吹いている。ホラ、ききようが震えている。

これは、あなたが育てた花ですか？

いや、育てなくても、丈夫な花です。

しかし、なんで床に穴を開けてまで？

違うんだよ、君、穴を開けた訳じゃないんだ。この家はね、このききようのあとに建てられた家なんだから。

えっ？

この辺りにビルが建つ前、ここが林の中だったのは知っているだろう？

そうなんですか？

君、いくつ？

三十です。

なんだ、同じ年かと思った。

あなた、いくつです？

六十。

親父より年上ですよ。

おれの親はもっと年上だぞ！

幸一 年下の親なんていませんよ。
男 バカな男だな君は。
幸一 なんですか。

男 戦後生まれはこれだから困る。

幸一 関係ないでしょ。戦争とは。

男 戦死した親はみんな年下じゃないか。

幸一 ……そういう意味とは知りませんでした。

男 バカだろう？

幸一 バカでした。

男 素直な奴だ。

幸一 バカですから。

男 とにかくこの辺りは林だった。ここは林の中の一軒屋だったのさ。これは私が生まれる前の事だから。私が見たというわけではないんだが、うちの親父が、ここに家を建てようとしたその時に、すでにもうこのききようは、この場所に咲いていたらいいんだね。

幸一 また、またあ……。

男 私だって信じられんけど、ホラ、咲いてるもの。なんでも、引っこ抜いたり、折ったりしちや、たたりが起ころらしいんだなあ。

幸一 折った人いないんですよ？

男 うん。

幸一 じゃあ、判りませんよ、たたるかどうか。

男 ダメだよ折ったりしちやあ、うちの親父が床に穴開けた苦勞が無駄になつちやう。
幸一 大の大人が信じますかね、そんなこと。

男 夏になるうが、冬がこようが、枯れないんだよ、君。ここは花屋の冷蔵庫じゃない
幸一 んだから。見ても信じないかね、君は。
なんかシカケがあるんだと思うなあ。

と、また床下をのぞく。

男 ダメだよ、さわつちや。これはね、ただの花じゃない。れつきとしたヒトの変わり

果てた姿なんだとさ。

幸一 ヒト？

男 かなわぬ思いに身を焦がし、待つて待つて待ち続けているうちに、こうして花一輪
幸一 に姿を変えてしまったあわれな人間が、これらしいんだな。

男 ギリシヤ神話じゃあるまいし。

幸一 ききよりの花言葉、知ってる？

男 さあ？

幸一 君、花屋でしょ？

幸一

男

幸一

男

幸一

男

興味ないもの。
じゃあ、この百合の花言葉も知らずに、キューピットしたのかい？
しましたよ。
花送ったりする奴はみんな花言葉の意味調べて送るぜ。だいたいギザなんだから。何でもいいから五千円分なんていう人、多いがなあ。
君みたいな花屋にキューピットされると迷惑だよ。結婚祝いにシットの黄色いバラを送りつけたり、出産祝いに「あなたの哀しみに寄りそう」って意味のりんどうの花つきつけたりしたりして、親しい仲を引き裂いたり、人の恋路を邪魔したりするんだ。

幸一

男

いろんな花がまんべんなく売ればいいんだよ、こっちは。花には季節があるんだから、年がら年中縁起の良い花ばかり置いてられないよ。花言葉なんか縛られちゃ商売にならないよ。
何も判つとらんな、君は。いいかい？なんで花言葉なんかあるのか、ということを考えてなくちゃ。野菜言葉なんて聞いたことある？魚言葉は？肉はどう？「愛してます」なんて、生の牛肉束にして送られても不気味だけど。食わなきゃ生きていけないようなものには、そんな言葉をいちいち考えたりしないよねえ。花を売り買ひするようになったのなんか、人が出来あがった歴史から見りゃ、極々、最近だろ？遊びなんだよ、遊び。遊びはねえ君、規制が多い方が楽しいんだよ。遊ばなきゃあ、君、花屋なんだから。縛られなさいよ、もつともつと。

幸一 充分つらいですよ。朝は早いし、赤ギレはできるし。爪は真黒になるし。当たり前だ。人を遊ばせる商売だもの。

幸一 あんたは何の商売を？

幸一 木こりだよ。

幸一 木こり？

幸一 この辺りは林だったんだ。

幸一 だって今じゃビルの林でしょ？

幸一 何を切ろうかなあ……。

幸一 ええ？

幸一 っつて、考えてるうちに四十五年は経ったかなあ。

幸一 で、今は何をして暮らしてるんです？

幸一 考えてる。

幸一 え？

幸一 考える人になったのさ。考える木こりにね。

幸一 働いてないんですね。

幸一 考えていたら働けないのが当然だよ。働かないぞ、考えているうちは！

幸一 変わってるね、オジサン。

幸一 私に兄弟はいないよ。

幸一 何です？

男 お前にオジサンなんて呼ばれるスジアイはないと言ったんだ。
幸一 だって、オバサンじゃないし、お嬢さんでもない訳だから。

男 萩原だよ、萩原富夫。萩の花言葉を知ってるかい？ 思案だよ、思い案ずる、まさに考える人の名だ。そして、また「内気」という意味もある。内気な想いに捕われる。ほんと、私そのものの名だなあ。

幸一 萩原さん、ここ、高いんでしょうねえ。
萩原 低いんだよ、平屋だもの。

幸一 この土地ですよ。売れば、高いでしょう？

萩原 坪百万かな。五十坪ぐらいはあるのかなあ……。

幸一 売れば、一生、考えて過ごせますね。

萩原 これが咲いてるうちはねえ。これには風が必要なんだ。コンクリートの中じゃ死んじゃうさ。

幸一 コンクリートは風をさえぎり伝説を埋めつくして空に向かうのかなあ。

萩原 空に？ 地面にだろう？ 地下に。この地球に。

幸一 そう思ってみると、この花はなんだか寂し気だ。

萩原 「変わらぬ愛」は寂しいものかな。

幸一 花言葉ですか？

萩原 そう、「変わらぬ愛」この花の言葉さ。

幸一 百年経つても変わらぬ愛があるのかねえ。

萩原 もつとき。もつともつと。

幸一 しかし何のために？

萩原 え？

幸一 誰のために咲く訳ですか？ききようになつてまで変わらぬ愛を貫き通しても、相手はいないんだから。ヒトであるうちにさえ振り向かなかつた相手が、花になつたらつて答える訳じゃなし。しかも先方はヒトのまま死んじやつてるんでしよう？どうも判らん、こいつの心理。

萩原

判らんさ、花だもの。

幸一、ききようを引っこ抜こうとする。

萩原 ダメだつてば！

幸一 何だか急にこいつが憎くなつてきた。

萩原 絶対にいかんよ、絶対に、ね。

幸一 そう言われちゃうと、ますますムズムズしてくるなあ。

と、土木作業員の格好をした若い男が黙って入ってくる。そして、小さい冷蔵庫からビールを取り出して飲みながら食事の支度をしたかと思うと、サツサと食べてしまう。萩原も若い男の出した食事をいそいそと食べ始める。

幸一、ア然として二人を見ている。

萩原 お帰り……。

若い男 ……。

幸一 誰です？

萩原 使用人だよ。

幸一 使用人？

萩原 うん。

幸一 なんか、えばってますよ。

萩原 は、働いてるからねえ……土栗君、おかわりは？……煙草吸うかい？あ、やめたん

だっけ？今日はいいいお天気だねえ。

土栗 あんた誰？

幸一 花屋です。

土栗 どの？

幸一 三丁目の角の……その……。

土栗 山野生花店？

幸一 知ってるんですか？

土栗 その向かいの工事現場にいたんだよ、さっきまで。

幸一 でも、使用人なんですよ？この。

土栗 ああ。

幸一 ……（と考え込んでいる）このベッドがあなたのなんですか？

土栗 ああ。

幸一 しかし、あと六つありますね。

土栗 あと六人いるからねえ。

幸一 使用人がですか。

萩原 そう、七人いるのよ、うち。

幸一 ……（考え込む）あ。

土栗 立ち入るんじゃないよ、人の生活に。

土栗の服を脱がせたり、たたんだり、着替えのパジャマを持ってきたりしている萩原。二人を見比べて目を輝かせている幸一。

土栗 立ち入るなつて。

幸一 想像しているだけです。

土栗 済んだんだろ？配達したんだろ？帰れば？

幸一 バイトが……。

土栗 ああ？

幸一 アルバイト済んでないから……。

土栗 ハギーあんだ。
萩原 ちよつとだけ、ちよつとだけ用事をね。
幸一 ハギー？
萩原 あだ名、あだ名、愛称です。
土栗 ハゲよりまじだろ？

と、幸一に言ってから萩原をにらみつける。

萩原 だって黄色が、黄色がね。
土栗 いくら？
萩原 イ、一万八千円。

土栗、さつき着ていた作業服のポケットから茶封筒を取り出して、中から二万円を抜いて幸一に渡す。

土栗 オツリ。
萩原 スミマセン。土栗君。
幸一 まだやってないから。
土栗 やるんだろ？

幸一 はあ……。
土栗 オツリ。

幸一、尻ポケットのサイフから二千円を五百円玉で渡す。

土栗 細かいな。

幸一 小銭は落とした時に判りやすいから。紙だと、音がしないでしょ？紙幣は持たない主義なんです。

土栗 無理するなよ。

萩原 ゴメンネエ、土栗君。ゴメンなさい。

土栗 働いても、働いても、これだもんなあ。

萩原 本当にごめんなさい。

幸一 あのう……。

土栗 仕方ないさ。使用人なんだから。寝る。

と、ベッドにもぐり込もうとすると、旅行カバンを持った蓮見なずなが走って現れる。

なずな

土栗さん、土栗、さんでしょ？待ってたのよ、三時間も。東京駅、銀の鈴前。午後

一時。まあ、パジャマ姿で。あつ！お悪いのね、どこか……だから来られなかったのね。一度でもあなたを疑った私を許して下さいますか。本当に私ってアサハカね。でも、こんなこと初めてだったから。ええ。いえ、でもこんなこと何度もあることじゃございませんものね。一度だけ。そう、人生でたった一度の冒険だわ。いえいえ、おもしろがつているんじゃないやありませんのよ。ただ、ドキドキするだけ。覚悟は決めました。決めたのよ、本当に。けれどやっぱり不安なの。父の財産も、夫の愛情も捨てて、見知らぬ土地であなたと二人。やっつけていけるのかしら。やっつけていくのよね、私達。ああ！でも怖い。恐いけど嬉しい。嬉しいけど後ろめたい。土栗さん、お熱あるの？出発は明日にします？それともご病気が治るまで、ここにかくまって下さいますの？土栗さん、土栗さん。

土栗

なぜな

土栗

なぜな

土栗

なぜな

土栗

え？
あんた誰？
今寝とかないと、夜中から仕事だから。
ハハハハハ、からかつてらつしやるの？
誰？
あの……。
知らんな……寝るよ。

と、ベッドにもぐり込む。



2002年宇宙堂試演公演より
なずな（左から2番目）登場

なずな

土栗さん、ひどくお悪いのかしら。か、看病しなくちや。治さなきや。私が判らないなんて。判らないなんて。困ります。私にはもう行くところがないんですもの。あの……。

萩原

なずな

お医者様を呼ばなきや。お薬飲まさなきや。主人に電話して、来てもらおうかしら、あの人医者なんだもの……。

と、電話をさがして手にする。

なずな

ダ、ダメよ。そんなこと。私はあの人を捨てたんだもの。そ、そうよ。どうすればいい、どうすれば！

幸一

ちよつと落ち着いてくださいよ。何一人で興奮してるんです？

なずな

ハッ！あなたは？
花屋です。

なずな

いい匂い。花屋さんはみんなそうなの？

幸一

このカサブランカが匂うんですよ。

なずな

まあ……気が付かなかった。土栗さんにお見舞いのお花を？

幸一

違いますよ。この人たいそう元気でしたよ。

なずな

どういうことです？

幸一
なずな

それを聞きたいのはこっちなんですよ。
私、この先の蓮見外科病院の院長に嫁いでおります、蓮見なずなど申します。父は光岡物産の社長で何不自由なく暮らして参りまして、蓮見と一緒にになりましたのも、父が交通事故で入院した際に、担当の医師だった主人をいたく気に入って、娘のむこは、こいつしかいないと思ひ込んでしまったためですの。
はあ……。

幸一
なずな

私はまだ高校生。咲く花の色も形も判らぬつぼみ。ただただ父に従って、蓮見と一緒にになりましたのよ。十八で結婚、二十で出産。お人形のような主婦になりました。長くなりそうだな。

幸一
なずな

はしよれって言うんですか。
できることなら。

幸一
なずな

じゃあ、ここに私の日記がありますから。後で読んで下さいますか？毎日かかさずしたためましたの。三十歳の今日まで。
根気あるなあ。

幸一
なずな

他にすることなかったんですもの。けれど三年前、庭の植木の剪定に土栗さんがいらっしゃるようになってから、私の人生は……フフフフ……。
なるほどね。判りましたよ。

幸一
なずな

まだ何も言つてませんよ。
若い植木職人が人妻を誘惑して、良い仲になっちゃった。それで二人で逃げような

なずな

なんてことになって、今日東京駅で待ち合わせたんでしょう？

……。

幸一

何です？

なずな

そう簡単に一口で言い切れるようなことした覚えはないんですけど。よくある話みたいで、パターンにくくられたみたいで、なんか不本意だわ、私。

幸一

でも、そうなんだから。

なずな

後悔していません、私。

幸一

お子さんは？

なずな

三人。

幸一

幼いんでしょう？

なずな

女中がおりますから。ベビーシッターも。あたし、どんどんおちていくんだわねえ。フフフフ。

幸一

でも土栗さんはほんとに知らないみたいだったね。あなたのこと。

萩原

ちよつといいですか？

なずな

何よ。

萩原

さつきから言おう言おうとしてたんだけど入れなくて……その植木職人っての、こいつじゃありませんよ。弟です、きっと。うり七つの。

なずな

うり七つ？

萩原

七人兄弟なんですもの。七つ子の。

幸一 おそ松君かい？

萩原 そら、六つ子だろ？

幸一 七人の使用人ていうのは七つ子の兄弟なんですか。

萩原 うん。土木作業員に植木職人。製紙工場の工員。家具屋、大工。俳優座大道具と、みんな木こりの使用人だけあって木（気）が多くて。

なずな 今さらそんなこと言われても、私、主人と別れてきたんですから。

萩原 あきらめた方がいいよ。今まであんたみたいな女の人、ずいぶん来たもんなあ。

なずな 私みたいなの？

萩原 うん。同じタイプ。

なずな 土栗さん、やっぱりあたしのこと好きなのね。あたしと似た人ばかり好きになるなんて。

萩原 ……。

と、「ただいま」と声がして、家具屋の土栗が後ろ向きに現われる。大きな木の箱を運んでいるようだ。

なずな 土栗さん！

土栗 はい。

なずな ひどいわ、ひどいわ、ひどいわ。

土栗 ちよつと待つてください、これ重いですから。

萩原 それか、新しい奴。

土栗 オランダ製の最高級品だよ。底んどこにちよつとした傷があつてね。半額でいいつて。

なずな 土栗さん！

土栗 はいはい。ちよつとどいて下さい。

声 オーイ、何やってんの？

土栗 スマン、スマン、つかえてんの！お嬢さん、ちよつとどいて下さい。

なずな、サツとどく。

長い木の箱のもう一方を消防服を着た男がかかえていた。

土栗 助かったよ、一人じゃどうにもならんかった。

消防士 いやいや、仕事の一環ですから。

と、床におろす。

消防士 じゃ、自分はこれで。

なずな ……紫苑……。

消防士
なずな
あ、義姉さん！どうしたんです？こんなところで
あ、あなたこそ。

消防士
火を消していただけですよ。

土栗
すごかったですものねえ。

消防士
ホント、ホント。

幸一
どこがです？

土栗
あれ？あなたは？

幸一
花屋です。さつき言ったでしょ！

土栗
ええ？

萩原
山野君、これは家具屋の土栗だよ。

幸一
あ、そう！で、どこが火事だったんです？

土栗
私の仕事場。家具屋。いや、燃えるよ家具は。あつという間だったね。

消防士
私ら到着したときにはもう手遅れでしたものねえ。

萩原
よく無事だったなあ。

土栗
せっかく半額でたいて買ったこれ、焼いちゃならんと必死でしたもの。

消防士
ガレキの中に、これ抱いてつたつてるこの人見たときには驚いたな。こんな重い

の一人で、こんな風に持っていましたからね。

土栗
火事場の馬鹿力ってホントだね。ハハハハ。

消防士
ハハハハ。義姉さん、この人知り合いなんですか。

なずな

家具屋ではなく植木屋さんの土栗さんと……。

土栗

なんだ、兄さんならさつきそこで会いましたけどね。

なずな

ほんと？（と、追いかけてようとする）

土栗

あ、無駄ですよ。そこでタクシー拾ってたから。

なずな

東京駅へ行ったんだ。（と、去りかける）

土栗

女の人と一緒にだったな。

なずな

どんな女？

土栗

丸ポチャで二重アゴの。

なずな

似てないじゃない！

幸一

これ、ヒツギですかね。

と、さつきから、木箱を観察していた。

萩原

うん、うちで使うにや、この形がちょうどいいんでね。前のがずい分古くなったん

幸一

で、買い替えようって、使用人たちと相談したんだよ。前のって。

萩原

ほら、その奥に見えるだろ？

と、奥の箱を引っぱり出してくる。

幸一

こんなところにこんなものがはまっていたのか。ほんとにこの家は変わっているよ。何が出てくるか判らんなあ……。

萩原、箱のフタを開ける。

萩原

ああ！

土栗が駆け寄る。

土栗

ああ！

幸一

何です？

萩原

消えちゃった！

幸一

何がです？

萩原

こんなことがあるはずないんだが。おい土栗君……。

土栗

兄ちゃん達呼んでくる！

と、部屋を出ていく。

なずな

消防士

なずな

消防士

なずな

消防士

なずな

消防士

なずな

消防士

なずな

消防士

なずな

消防士

なずな

消防士

なずな

消防士

幸一

紫苑さん、許して下さいね。

何をです？

私、もう帰りませんから……。

どこに？

家입니다。あなたの兄さんの家입니다。

じゃあ、どこに帰るんです？

これから探します。私の家を。

兄さんとケンカしたのかい？

ケンカなんて……してみたかった一度でも。

兄さんのこと嫌いになったのかい？

好きになったこともないのに、嫌いになんかなるもんですか。

判らないなあ、義姉さんの気持。何不自由のない暮らしでしょ？

不自由がしたいのよ。何かに縛られて生きて行きたいの。生きるために何かをした

いの。

ぜいたくな悩みだなあ。

紫苑さんだって医者にならずに消防士選んでくせに。

僕には僕の事情があるんだよ。

どんな？

なんだよ、急に。

幸一 やる事なくて退屈なんですよ。

と、幸一、カサブランカのつぼみを見つめる。側では萩原がうろたえ、興奮し、一人で騒いでいる。

消防士

退屈しのぎに聞かせるような話じゃないよ。こっちは必死なんだ、真剣なんだ。今時、きつい、きたない、危険の三拍子そろった職業を選んだんだ君、この若さで、えらかないか？ええ？花屋やってて死んだ奴なんていないだろう。

幸一

い、いるかも知れないよ。花屋だからって死なないとは限らないだろう？花アタリとかする人いるもの。

消防士

幸一

花アタリ？花食う花屋なんているかよ。ポインセチアだって、サルビアだって、ヒヤシンス、花みずき、みんな葉っぱにや毒があるんだ。食ったら死ぬらしい。

消防士

そりや食った奴が悪いんじゃないか。花屋が仕事中に死ぬっていったら、配達中の交通事故ぐらいだろ？花屋なんか、生死をかけた職業とは言えんさ。

幸一

なんかってなんですか。なんかなんか言われたくないなあ。第一、君は年下だろ？敬語使えないかなあ……。

消防士

敬語つてのは、敬って初めて使うもんなんだよ。尊敬してない奴に使えるか！

幸一

くそう……。

消防士

敬語は僕にこそ使いたまえ。君は商人だろう？こっちはお客になり得る人物で、しかも3Kの消防士なんだから。

幸一

年下の奴に使えるか！

消防士

キコもマコも年下だぞ！

幸一、首をかしげる。

なずな

私はどうしたらいいんでしょう。

幸一・消防士

ええ？

消防士

ああ、忘れてた。義姉さん、帰ろう。もうそろそろ夕御飯の時間だろ？

なずな

夕御飯なら、愛する人のために作りたい。

消防士

何女学生みたいな事言ってるんです？第一、作ったことなんかないでしょう？全部女中まかせで。僕が言ってるのは、帰って夕御飯食えっ！ってこと。

幸一

まあまあ、あんたに事情があるように、この人にも事情があるらしい。そつとしておいてやれば？そつとしておけば花粉もつかないんだ。早く職場に帰ったら？

消防士

この人は僕の義姉さんなんだよ。ほつとけないよ。

幸一

なずなさんが亭主と別れたら、あんたは赤の他人だよ。なずなさんは別れたいと言っている。つまりあんたとは他人になりたいんだ。明日の他人がとやかく言うこと

消防士

はないだろ？

今日はまだ身内です。義姉さん、義姉さん。僕はあなたと、他人にはなりたくない。

あなたと何かでつながっていたい！

なずな

あ？

消防士

あ？はないでしょう。人がせつぱつまった告白しているのに。

なずな

え？

消防士

判らんかなあ……。

なずな

この人何言ってるの？

幸一

弟さんはあなたのことが好きなんだよ。

なずな

知ってるわよ。仲良いものあたし達。

幸一

そういう事じゃなくって、

と、耳もとでささやく。

なずな

ハハハハハハ、また、またあ……ハハハハ。

消防士

ハハハハハハ、……ほんとですよ。

なずな

……。

消防士

僕も中学生の頃からいろんな女と付き合ってきましたけどね。こう見えても、もてるんですよね、僕って。なんでこう女がほつとかないのかと思つて、付き合う度に

女に聞いてみたんですよ。そしたら、普通のところがいいって言ってますよ。油っぽくもないし、癖もない、一度会っただけじゃ顔も覚えられないような、どこにもいそうな感じ、熱さも激しさも感じない。別れてもすぐに忘れてしまえそうな、後を引かないタイプだって言うんです。付き合うのもカンタン。別れるのもカンタン。遊ぶには最適だって、言うんです。遊んだつもりで遊ばれたんだって、最近やっつと判りましたよ。

と、煙草を取り出す。

幸一、反射的に火をつけてやる。消防士、その火に顔を近づけて煙草を吸おうとしてハツとなる。

消防士

何するんだよ。(と、飛びのく)

幸一

え？

消防士

吸わないよ煙草なんか。出ただけだろ？今度僕の前に「火」出したら、ただじゃ済まんぞ。

幸一、消防士のただならぬ態度にあきれて火を消す。

消防士

体としての女と向き合って、体と付き合って、その体を集めたり、捨てたり、傷つ

幸一

けたり忘れてたりしているうちに、ハタチを過ぎて、イヤーになっちゃった。あきちゃったというか、底が見えたというか、面倒臭くなったというか……。僕に必要なのは、体のない女なんだということによるやく気付いたのさ。体のない女？

消防士

そうさ。それが義姉さんさ。けっして体と付き合うことのない、永遠の女だ。それが、赤の他人だなんて言われちゃったら、僕はどうなる？また体と付き合って、遊んで遊ばれておしまいになるんだ。義姉さんには、義姉さんでいてほしい。好きなんですよ義姉さんが。

幸一

ずいぶんエゴイステイックなやつぢやなあ。

なずなの態度が変わる。

なずな

そんな、おもしろいこと、どうして早く教えてくれなかったのよ。言ってくれたらたいくつしないで済んだのに。

幸一

なずな

こいつあなたのことが好きなんじゃないよ。あなたとの関係が好きなんじゃないか。どっちでもいいわよそんなこと。あたしはね、誰かに求められたいだけ。あたしを好きだと言ってくれる人が欲しいだけなのよ。だれかの期待に答えながら、誰かのために生きていきたいのよ。

と、百合子が隣室より現われる。

百合子

疲れるわよう。あなた、それ、とても耐えられるものじゃない。

幸一

あ、百合子さん！

さつきからローバイしつづけていた萩原、百合子を発見してバタリと倒れる。

幸一

あ、萩原さん、どうしました。萩原さん。

百合子、その辺にあつた掃除用のバケツの水を萩原にぶっかける。

消防士

あ、僕に言ってくれば、このホースでやりましたのに。

と、ドヤドヤと大勢の靴音がする。しかし、現われたのは土栗一人、この土栗は先の二人の土栗とは違う土栗のようだが、顔がそっくりなので、どの土栗なのかは判らない。

土栗

あっ！ご、御主人！



2002年宇宙堂試演公演より
百合子（杉嶋美智子）が萩原（土屋良太）、土栗と再会する

と、百合子に駆け寄る。そして戸口に駆け寄って、外に声をかける。

土粟

御主人様が目覚められたぞ！おい！みんな、早く来いよ！おい！何やってんだよ！早く早く。

しかし、誰も現われない。

土粟

おかしいな、みんな何やってんだ。

萩原が正気に返る。

萩原

起きたんですか。

百合子

ええ……さつき。

萩原

どこ行つてたの？

百合子

バカねえ、自分の部屋に決まってるでしょ？久し振りだから、そうじしてたのよ。

クモの巣だらけだったわよ。

萩原

あれから誰にも開けさせず、あの時のままにしてあるのさ。

百合子

ずいぶん老けたわねえ、あんた。

萩原

当たり前だよ、何年経つたと思つてるの？でも、どうして目を覚ましたんだい？今

百合子

萩原

幸一

土栗

萩原

土栗

幸一

土栗

幸一

土栗

萩原

幸一

土栗

幸一

百合子

幸一

まで、どうやっても起きなかったのに。

その匂いよ。その百合の匂いに誘われたのよ。

こいつか……。こいつが起こしたのか……。

あの……。

やっと現われたんだねえ。

うん、やつと。

良かったなあ……。幸せにしてくださいよ。で、あなたの職業は？

花屋だよ！何度言ったら判るんだ！

はあ？

こいつも別の奴か。面倒臭いやつらだなあ。

王子様じゃないのか、ただの花屋か……。

仕方ないよ、ここは日本なんだから。王子なんてめったにいないんだから。誰だっ

ていいよ。起こしたんだから。毒を吐き出させた奴が、誰でも王子なんだから。

毒？

毒りんごの毒だよ。それで眠っていたんじゃないか。御主人様は。

どうも事情が飲み込めないなあ……。

いいのよ、飲みこまなくて。これからじっくりとかみくだかなくては。

私は、この花を配達しただけなんだ。まさか、ノックの音で、寝ていた病人起こす

とは思わないし、そら悪かったけど、鍵開いてたし、ここに置いたらすぐに帰るつ

もりだったし……。巻き込まれたくないなあ、よそ様の家の事情に。

萩原 よそ様の話じゃない。君自身のお話だよ。

幸一 なんだって？

萩原 純潔と貞操の花を届けて、母さんの傷口を開き、目を覚まさせたのは君じゃありませんか。

幸一 母さん？

萩原 そうだよ、母さんさ。夢でしか喋れなかった母さんと、やっとうとうして話ができるんだなあ。

百合子 あたしが最後にあんたの夢を見たときは、あんたはまだ生まれたての赤ん坊だった。二度目は小学生、三度目はハタチの成人式。目覚めてみると、こんなオヤジになってたなんて。あたしも随分とおばあちゃんねえ。

幸一 二十代にしか見えませんけど。

百合子 眠った時は十八だった。

土栗 棺は腐っても、御主人様は腐らずに、眠っている間に子を孕み、産み落とし、あの時のままで生き返り、あの時のままの口をきく。

幸一 いつなんだよ百合子さんが眠ったの？

土栗 二百年か、はたまた三百年か、余り遠くて数えられぬ昔に。

幸一 いくつなんだよあんた。

土栗 二十八。

幸一

土栗

なずな

幸一

なずな

消防士

なずな

消防士

萩原

計算が合わないじゃないか。

私たちはこの家の代々の使用人、親から子へ、子から孫へと伝え聞き、DNAで覚えて先祖の記憶を生きているんだよ。

まさか。

え？

あなた達、七人の小人の子孫だなんて言うんじゃないよ？

七人の小人って、あの白雪姫の？

だって毒りんご食べて眠り続けたなんていうから。

だってあれはグリムの童話だろ？

童話なんかじゃない。これは実話なんだ。ほんとにこいつら、七人の小人なんだよ。

童話みたいに、すぐに王子が現われなかっただけなんだ。現実には、やっぱりいさ。母さん、あれから何度も戦争があつたよ。ここが焼けずに済んだのは

母さんの力かもしれないねえ。

幸一

土栗

こいつ小人じゃないじゃないか。

代を重ねたからだよ。小人から、ずいぶんと小柄な人へ、ずいぶん小柄な人から、ちよつと小柄な人へ、ちよつと小柄な人から、標準体型へと、血と血が入り混じってこうなっただけだよ。しかし、遺伝というものは恐ろしいねえ。いつの時代も、子供はちゃんと七人なんだから。

幸一

ああ言えばこう言うところがなおさらあやしいな。

萩原 とにかく、花屋の王子が現われたんだから、嫁入り道具の買い出しに行こう。
ちよつと待てよ、あんたの父親は誰なんだよ。おかしいじゃないか？あんたは六十
歳だつて言つてたろ？

萩原 父親は木こりだよ。眠つてた母さんに恋をして、ここに家を建て、そして母さんが
目覚めるのを待たずに死んだあわれな男だつたよ。

幸一 眠つたままの女とやったのか？エツチな奴だな。なんで小人が止めなかった？
王子かと思つたんだよ。Hなことすりや起きるかと思つてじゃないか。つてじいちゃ

んが言つてたよ。子供生んでも起きないんだものなつて言つたのは父ちゃんだつた。
そんな御主人を、あんたが起こしたんだから、たいしたものさ。

萩原 いくぞ！土栗君。

土栗 うん。外の兄弟達も、話はずつと聞いてたはずだ。

と、出て行こうとする。

なずな

あんた、土栗さんね？植木屋の土栗さんでしょ？鼻の頭のバンソーこう、夕べ、う
ちのミルキーちゃんがひつかいた傷では！

土栗 知らんよつ。

と出て行く。

なずな
待つて！

と、追いかける。

消防士
義姉さん。

と、後を追う。幸一と百合子だけが残る。

幸一
これは何の芝居です？ 貧しい花屋をからかって、何の得があるんです？

百合子
夢でしか見たことのない外の世界をこれからは幸一さんが見せてくれるのね。連れて行ってくれるんでしょう？

幸一
え？

百合子
あなたが花屋の長男だったら、あたしは、花屋の奥さんになるのね？

幸一
待つて下さい。俺には王子の役なんてできませんよ。カサブランカが咲き切ったら、俺はここから出て行きます。

百合子
この百合、カサブランカって言うの？

幸一
ええ、百合の仲間じゃオシベの黄色が一番でかいんです。

百合子
あなたの名前は？

幸一 幸一です。山野幸一。

百合子 あ……。

幸一 また風だ……。

ききようが揺れる。

百合子 折っちゃダメよ。

幸一 判つてますよ。

百合子 あたし、おそうじしてくるわ、まだ途中なの。幸一さん、ここで待ってらしてね。後でおいしいお茶を入れますから。

と、隣の部屋に入る。

幸一 今がチャンスだな。バイト代返しときやいいんだもの。

と、ポケットから二万円出して、テーブルの上に置く。

幸一 二千元、損したな。

と、ドアから出て行こうとするが引き返す。

幸一　このききよう貫つていこう、昭次に見せたら驚くぞ。ないはずのものがある場合もあるつて言ったら、喜ぶかな。

と、ききようを根元から引っこ抜こうとする。なかなか抜けず、奮闘する。がようやく途中から折ってしまう。

と、辺りはただならぬ雰囲気。

地の底から恐ろしげな声が聞こえる。

声　折ったなあ〜
幸一　ヒヤ、ハ、ホへ……。

と、ききようがはえていた床下から蒼白い顔の男がヌーと現われる。恐怖にひきつり、動けない幸一。

男　ただいまあ〜
幸一　な、なんだ、お前は……。
男　帰ってきましたあ〜

幸一　だ、誰だ、お前は……。
男　　ききようですう。
幸一　ききようならここに……。

と、折ったはずのききようを探すが、その手から消えている。

幸一　あ、あれ、あれ？ワッ！ハッ！いやあ……この、その……。
ききよう　落ちついて下さいよ、幸一さん。

幸一　なんで俺の名を。
ききよう　さつきからここにいたんですから。おかげで助かりましたよ。あなたが折って下さ

幸一　らなかったら、私は永久に花だったものねえ。
ききよう　たたるの？あんた。たたり起こしちゃう訳？

幸一　どうしようかなああ……
ききよう　ききようさん。

幸一　なんですう……？
ききよう　たたつてもいいですから、俺が、俺があんたを折ったつてことだけは、みんなに秘

幸一　密にしてくれませんかね。
ききよう　どうしてえ……？

幸一　絶対ダメだって言われたことだから。何かあったら責められるし、責任かぶせられ

るもの。

きぎよう

でも、折ったのはあなたですう。

幸一

そうだ、家行きましょう。ハラ、ヘラヘン？家で飯食おう。親父達もう晩飯、食ったかなあ。

と、急に関西弁になる。

きぎよう

急になまらはってどないしやはりました？

幸一

アセった時と、夢の中ではそうなんです。

きぎよう

生まれ故郷は関西ですか？

幸一

小学校四年生まで京都におりまして。いいから、早く行こ。

きぎよう

ダメなんや。あかんのや。私の脳の中には、「変わらぬ愛」がありますのんや。今、

幸一

ここを離れたら、ここにこうして三百年、枯れずに咲いていたかいがない。

幸一

あんたまで関西使わんでもよろしい。

きぎよう

三百年前はみんな関西弁やったんやで。

幸一

嘘言うな。

きぎよう

嘘と違います。見た人誰もおらんのやさかい、私がゆうたらみんなほんますう。

幸一

どないしよ。早く出て行かないと、百合子さんが来てしまう。

きぎよう

フッフッフ。

幸一 なんや。

ききよう 百合子さん、ええ名前やなあ……。

幸一 気味の悪いやつぢやなあ。ききようになつたなんて言うから、てつきり、きれいな

女の人かと思つていたのに。みんなの夢を壊す奴だな。

ききよう 男だつて待ちますう。

幸一 ききようでいたほうがきれいだった！

ききよう ほつといて。

と、お茶を乗せたお盆を持つて百合子が出てくる。ききようは、ちようど百合子が開けたドアにはさまれて見えなくなる。ペチャンコになつたかも知れないききよう。

百合子 やつときれいになつたわ。

幸一 ……。

百合子 はい、どうぞ。

幸一 ……。

百合子 アップルティーよ。

幸一 りんごの？

百合子 毒入りじゃないわよ。

と、テーブルにお盆を乗せる。

百合子

あら、このお金は……。

幸一

あ、バイト代。

と、しまう。

幸一

ひとつ咲きましたね。

と、オシベをつみとる。

百合子

何してんの！

幸一

バイトです。オシベの黄色を……。

百合子

去勢するの？

幸一

そうとも言えるのかなあ。

百合子

ダメよ、そんな。

幸一

萩原さんの指示だから。

百合子

あの子はまたそんなことを……。

幸一 え？
百合子 いえ、別に……。

と、ドアを閉める。すると、その陰よりききょうが押し花のように平らになつて倒れ込む。

百合子 キヤツ！

幸一、とつさに、倒れたききょうの上におおいかぶさつてかくす。

百合子 何してるの？

幸一 何にも。

百合子 あら、ききょうが。

と、穴だけになった床に気づく。

百合子 まさか、幸一さん……。

幸一 いえ、折ってません、折ってませんよ僕は。

百合子 それでは、ききょうは一体どこに？

幸一の体の下で動くききよう。

ききよう

ここです、ここですよ百合子さん。

百合子

あああ！

と、逃げようとする百合子。

ききよう

逃げられませんよ百合子さん、あなたは僕から逃げられっこありませんよ。

百合子

幸一さん、あなた、何てことしてくれたの。

幸一

つい、この手が。花屋のサガかも知れません。

ききよう

百合子さん、僕はいつまでもあなたを待ちます。今まで待ったのだから、いくらだ

って待てますとも。

百合子

あたしはこの人と一緒になるんです。もうここには帰って参りません。

ききよう

君はここから出られないさ。君を今日まで生かしてきたのも、この僕なんだから。

幸一

ききよう男が恋焦がれ、待ち続けた相手は、あなただったんですか。ちよつと待て、

驚いたり、感心したりしているうちに、僕はここでの嘘みたいな話を信じようとして

いるぞ。こんなことが、あるはずがないんだ。大の大人が乗せられてどうする。

この床下にかくれていたこいつが、この穴から出てきただけの、芝居なんだこれは。

ね、そうだよねえ。
そう思えばそうだし、そう思わなければ、そうじゃない。現実なんてそんなもんだらう。

百合子 幸一さん、私を助けてくれるんでしょ。一度助けてくれたんだもの。二度、三度と

私を助けて、幸せにしてくれるでしょう？

幸一 おれは一体どうすればいい？

百合子 あなたがここに来たのは、私を助けるためなのよ。眠る私の姿を盗み見て、私に恋したからなんだわ。ホラ聞こえるでしょう。私のおなかの中の幸一さんの赤ちゃんの心臓がドクドク言ってる。

幸一 ええ？

百合子 眠っている間にまた孕んでしまったのよ。あなたの子よ。

幸一 そんなバカな。今日初めて会ったのに。

百合子 あなたがそのドアをたたいた時よ。あなたの種が飛びました。

幸一 飛んだのは花粉だ。

百合子 あなたの子供よ。

ききよう 僕のだらう？百合子さん。風に乗って舞ったのは、僕の花粉さ。富夫だって本当は僕の息子だろ？僕はずっとここにいて、百合子さんに種を撒き散らしていたんだからね。

百合子 あなたになんか指一本ふれさせてたまるもんですか！だれがあなたの子供なん

か！

きぎよう

どうしてそんなに僕を嫌うのかなあ。……気が合ったろ？僕は。

百合子

暗いのよあんた。重いよあんた。不健康な人って大嫌い。あたしはキリキリ働きたいの。ベトベトしたの嫌いよ。近所の子供に、おばちゃん、おはよう！なんて言われて、元氣かい！って答える、みたいな、普通の暮らしがしたいんだもの。いらっしやい！まいど、いい天気だねえって、早起きして、そして、そして、洗濯して、雑巾がけて、世話するのよ。家族みんなの世話するの。愛されたくなんかいいわ。期待されたくないの。私が好きになるのよ。何でもよ。私が好きならそれでいいんだもの。

きぎよう

先に言い寄ってきたの、百合子さんだったじゃないか。

百合子

そう思ったのよ、初めは。良くあることでしょ？交際してみても、判ることってあるわよ。こんなはずじゃなかったって思うことあるわ。若かったもの。あたしがあんたを好きなのは幸せだった。あんたがまだ手の届かない人だったうちはね。でも、その手が届いて好かれましたら、嫌になったのよ。ベタベタくっついてきて、こぶみみたいに離れないんだもの。どこ行くんでもつきまとって、シット深いし、幼稚だし、まともな会話できないんだもの。引きずり込まれたくないのよ、あんたの性格に。怒ってるか、泣いてるか、笑ってるか、沈んでるかしかかないんだものあんた。疲れちゃうわよ。普通の状態でいられない人とは生活していけないわよ。

きぎよう

三百年前と同じことを言うんだね、君は。でも、何言われたって平気さ。僕の愛は

変わらないんだもの。

百合子

あたしは、この人が好きなのよ。忘れてちょうだい、あたしのことは。

幸一

参ったなあ……僕の意志はどうなるんだよ。

百合子

幸一さんの意志は、あたしをさらって逃げることよ。

幸一

(ききように) あんたもねえ、他の人探したら。あんなこと言われて腹立つだろ？
君ならいくらでもいるぜ。好きになつてくれる人がさ。

ききよう

あきらめられるくらいなら、三百年も待ちませんよ。僕はあなたを殺しても、百合子さんを手に入れますからね。

幸一

ほんとに暗い奴だなあ。

ノックの音。

幸一

誰だ？萩原さん達が帰ってきたのかな。

と、ドアを開ける。と、ボタンの花かごを持った昭次が立っている。

幸一

昭次！

昭次

兄ちゃん……探したよ。

幸一

なんだ、どうしてここが？

昭次 父ちゃんに聞いたんだ。帰りが遅いって心配してるぞ。

幸一 仕事頼まれたんだよ。お前、学校行ったか？

昭次 兄ちゃん、これ。

幸一 なんだよ、また花キューピットか。嫌だなあ……百合子さんサインお願いします。

昭次 違うよ。これ、兄ちゃんにだよ。

幸一 ええ？俺に？

昭次 花屋に花キューピット便送る奴もいるんだって、父ちゃん苦笑いしてたよ。

幸一 わざわざ持つてくるなよ。

昭次 配達したほうが感じが出るだろうって、父ちゃんが。だって、これうちの花だけ。

父ちゃんが作ったんだ。家に一番近い花屋って、うちだもんな、ハハハ。うちで作

ってうちで渡すのはテレるだろ？父ちゃんだって。はい、兄ちゃん。おめでとう。

ここに置いてくね。

と、壁際に置いて、辺りを見回す。

昭次 兄ちゃん、仕事ってまだ終わらないの？

幸一 昭次、兄ちゃん今大変なんだ。この人が兄ちゃんと……。

と、二人、振り向くと百合子とききようは消えている。

幸一 あれ？今、ここにいたろ？百合子さんて女の人と、男の人が……。

昭次 ……兄ちゃん一人だったけど。僕が入った時はね。

幸一 ……隣の部屋かな……ちようどいいや、帰ろう昭次、厄介な話に巻き込まれちゃつてね。

昭次 兄ちゃん、花キューピット。(と、ドアから出て行く)
幸一 そうか……。

と、ボタンの花かごを持ち上げようとする。と、大輪のボタンの花の一つが人の顔になっている。

幸一 ウワー！

花かと思った人の顔、前に突き出て、飛び出してくる。

幸一 なんだなんだ。

花から抜け出したその女、幸一に飛びつく。

女 幸ちゃん！
幸一 何だよ、誰だよ。
女 あたしよ幸ちゃん、ボタンよ、柳沢ボタン。
幸一 えええ？
女 京都の小学校で同級やったやろ？
幸一 あああ！
女 一緒に保健委員やったやないの。
幸一 なんでまたボタンちゃんが、ここに？
ボタン 誕生日オメデトウ！
幸一 ええ？
ボタン 三月三日やろ？
幸一 二日だよ、俺の誕生日は、
ボタン そうや。だから今日来たんや。
幸一 京都からわざわざ？
ボタン 忘れたん？約束したの忘れたん？
幸一 何の約束？
ボタン お互い三十歳まで独身やったら結婚しようって約束したやんか！うちの誕生日は二月十四日や。な、一人とも独身のまま三十歳になったんや。うち約束果たしに京都から来ました。末永くよろしゅう頼みます。

幸一
ボタン

ちよつと待つてよ。約束言うても、小学校の話やぞ。

ということはなしにしよて幸ちゃん言うたやないか。大人になつてからあれは小学校の約束だからなんて言つたら許さんぞつて。怖い目えして言うたやないの。だからうち、忘れんかつたんやもの。幸ちゃんのあの真剣な目え思い出すと身震いするで。そやから今まで一人でいたんや。好きな人できるたんびに幸ちゃんのあの目思いだして、あきらめてきたんや。

幸一
ボタン

そんな目したかなあ。

したした、怖い目やつた。子供やつたけど、うちのことほんまに好きやつたんやね。

結婚式、いつにしよ。

幸一
ボタン

いや、しかし……その……。

ボタン

処女やないけど、いいでしょ？三十で処女言うたら、逆に怖いでしょ？

幸一

ボタンちゃん、君、本気やないよね？

ボタン

……。

と、ハンカチを出して号泣する。

幸一

ボタンちゃん……。

ボタン

結婚しよなんて、女から言うの、どんなに勇気がいったか。判らんの？会社もやめてきたのよ。幸ちゃんびつくりさせようと思つて、こんな格好までしてきたのに。

幸一
ボタン

明るい人が好きって幸ちゃん言ってたから、明るすぎるくらい明るくひょうきんに出てきたのに、恥かかせるの？子供のままの君が好きって言ってたから、背えも伸ばさんと、あの時の体型のまま、ここまで保ってきたのに。裏切るん？崖から突き落とすの？乙女の純情を、突き落とすんやね幸ちゃんは！
小……小学校の時やからなあ……。
つて言うたら許さへんて言うたあ……。

と、又泣く。

幸一

今日は一体どうなってるんだ。

と、ボタンの襟元から緑色の変なものがニョロニョロと出てくる。

幸一
緑色の虫

なんだ、なんだ、今度はなんだあ！
昆虫です。

幸一
ボタン

花食ってたのかこいつ。
もう三十やもの。虫もつきます。

幸一

恐ろしくでかいなあ……早く潰しとかんと、花がみんなやられるなあ……。

昆虫はそこらの花をムシヤムシヤ食い始めている。

幸一
こいつ！

と、たたき潰そうと追いかける。

ボタン
幸ちゃんやめて！可愛そうやんか！今はこんな醜い体でも、いつかはきれいな蝶になるのよ。

幸一
昆虫は花屋の天敵なんだよ。

ボタン
幸ちゃん。昔はあんなに昆虫が好きだったのに。

幸一
花を虫から守るのも花屋の仕事なんだから。

ボタン
自然界の仕組みを変えてまでやる仕事は間違っていると私は思うわ。

幸一
花屋の花は売るために育てた花やから、自然界のとは違うんだよ。そこにはびこる虫もそうだ。だからいいのさ。殺さなあかん！

ボタン
難しいこと判らんわ。ただ可愛そうなだけや。でも、幸ちゃんがそこまで言うなら、うちも手伝うわ。

と、昆虫を追いかける。

打ちのめされる昆虫。幸一、ボタンのあまりの激しさにあきれて見物している。

昆虫、まさに虫の息。

ボタン 可愛そう……あとでお墓作ってあげるね。ハハハハハ。

幸一 何。

ボタン だって、旦那様の言うことなら、なんでも聞けちゃうあたしって、おもしろくて。

幸一 はあ？

ボタン ハハハハハハハ。女って、男しだいなのねえ。

幸一、首をひねる。

ボタン さ、あなた帰りましょうか。

幸一 え？

ボタン 先に籍だけ入れちゃって、式は後にしたっていいんだものね。働いて、お金ためちゃって、豪華にさあ、オーストラリアの教会かなんかで、なんだつけこういの？ぬいぐるみみたいな動物抱いて、式あげるのっていいわよねえ。

幸一 カンガルーか？

ボタン バカ！違う、こういうの！

百合子 コアラでしょ。

ボタン そうそう。

百合子

幸一さん行こう！

幸一

ききよう男は？

百合子

りんごのお茶で眠らせたわ。

幸一

じゃ、さっきのに？

百合子

ごめんね、幸一さん眠らせて、かついで、一緒に逃げようと思ったのよ。ここから三丁目まで。

幸一

強引な奴ばかりだなあ。

ボタン

幸ちゃん、この人誰？

幸一

百合子さんだよ。

ボタン

どういう関係？

百合子

家内です。

ボタン

幸ちゃん！独身やなかったの？

幸一

いや、これはその、

ボタン

聞いてないわよ、こんな人のこと。

百合子

今日からです。ついさっき一緒になりましたのよ。

ボタン

それならうちと一緒や、うちが幸ちゃんのお嫁さんや。（と二人アドリブで言い争っている）

幸一

もててもちつとも嬉しくないなあ……。

と、昆虫がピクピク動く。

幸一 あ、昆虫……。

と潰しかける。

昆虫 ウウウウ。

と涙を流す。

幸一 なんか気の毒に思えてきたなあ……オスはオス同士だものねえ。

と、介抱してやる。元気にはい回る昆虫。幸一ドアからそっと逃げ出そうとする。

と、ドアの外から小人の歌声が聞こえる。

幸一 あっ！七人の小人が帰ってきた。どうしよう。

昆虫、自分の背中に乗るように指示する。

幸一 え？

昆虫 恩返し、恩返し！

と、床に開いた穴を指す。

幸一 ここから逃げるのかい？

昆虫 内には女。外には小人。出口はここしかありません。

幸一 よし。

と、二人こっそり穴から降りていく。百合子とボタン夢中で言い争い、最後には正座して身の上話なんかを始めていた。と、目覚まし時計が鳴ってベッドで寝ていた土木作業員の土栗が起きる。

土栗 あああ……。

百合子とボタン、ア然として土栗を見る。

土栗 あれ？

百合子とポタン、幸一がいないのに気付く。

百合子・ポタン

あれ？

と、ドアより萩原が入ってくる。

萩原

あれ？

と、辺りは変化し、山野生花店の茶の間である。

幸一

まさか昆虫に助けられるとは思わなかったなあ。

茶の間で家族が食事をしている。顔はよく判らない。

幸一

ただ今！ひどい目にあつたよ。どうしてあんなことに……。

と、父親だと思っていた家族の一人が顔を上げる。消防士に似ているが別人のようである。

家族 1

お帰り、遅かったね、兄さん。

幸一

あれ？あなたは？

家族 1

何言ってるの？

母親だと思っていた家族 2 が顔を上げる。なずなに似ているが別人のようだ。

家族 2

先に食べちゃってるわよ。混んできたの？道。

幸一

あの……ここは山野生花店ですよ。

家族 2

当たり前でしょ！おみそ汁あつため直すわね。

と台所に立つ。

家族 1

兄さん、義姉さんカンカンだよ。今日、定休日だから、誕生日のお祝い今日にしよ
うって言ったの兄さんじゃないか。さつきまでデコレーションケーキに、ロウソク
さして待ってたんだからね。食べちゃったよ、待ちきれなくて。

昭次だと思っていた子供が顔を上げる。

家族3 食べちゃった。パゴメンなさい。

幸一 昭次！お前さつき……。

家族1 昭次は僕だよ。

幸一 だってこいつは、

家族3 パパ、おひな様持つてないの、クラスであたしだけよ。昨年言ったじゃない、来年は買ってやるって。

家族2 わがまま言わないの。うちでは春になると、桃や桜が、いつでも満開なもの。毎日がおひな様でしょ？

家族3 だって約束したんだもの。約束は破っちゃいけないって言ったの。パパだもの。あなた。

幸一 ……。

家族1 義姉さん、ケーキ食べちゃったけど、歌、歌っちゃおうか。

家族2 そうね、あざみ。

家族3 さん、し、

一同 ハッピーバースデーツーユー、ハッピーバースデーツーユー。

幸一 俺はいったいいくつなんだ？

家族2 やだわあ、五十じゃない。あざみが十五になったんだから。

幸一 あざみ？

家族1 兄さんがつけたんだろ？



1991年初演より

家族1、家族2、家族3とりんごを手にする幸一

左から、鴨鈴女（家族2）、河野洋一郎（幸一）、山下千景（家族3）藤田辰也（家族1）

家族3

そうよ、嫌だわ、あざみの花言葉は、復讐なんだもの。パパ知っててつけたんではない。あたしは、誰かの復讐のために生まれてきたんじゃないかって思っちゃうわ。花屋なんだから……もつといういろいろ花の名前があったのに……。

昭次。

幸一

家族1

え？

幸一

おれはお前のりんごの中に迷い込んだんだろうか？

家族1

りんご？

幸一

ここは一体どこなんだ。

あざみと呼ばれた家族3、その時りんごをガブリとかじる。

幸一

やっぱりお前は昭次だな……。

と、家族3のりんごを奪いとる。

家族2

何してるの？あなた。

幸一

このりんごが俺の世界を消したんだ……。

家族2

りんご、りんごって、あるはずないでしょ？りんごなんて……三月よ、今は。

家族1

兄さん昔からそんなこと言ってたよ。毎日りんご食べなきゃ元気が出ないなんて言

幸一

って……嘘つこの見えないりんごをガブリとやるんだ。まだ治ってなかったの？子供の癖の癖。
俺じゃない。昭次の癖じゃないか！りんごを……りんごを……でも、このりんごは、なんて赤いんだ……。

店の方から声が聞こえる。

声

今晚わ！

家族2

すみません、今日は定休日なんですよ。

しかし客がズカズカやってくる。

客

花キューピットには定休日はないと聞きましたけど。

家族1

義姉さん。サービスしちやえば？ヒナ祭りなんだし、

家族2

そうね。どんな花をおいくらぐらいで？

客

白い百合の花かごを一万八千円分。

家族2

百合ですね？カサブランカなら仕入れたばかりですけど。

客

ええ、カサブランカで結構です。この匂いがそうですね？……きつい香りだ……眠れないほどに……。

幸一 お前は……

客、まぶかにかぶっていた帽子を取るとききようであった。

幸一

ききよう……。

家族1

ききようじゃなくて百合だよ兄さん。

家族2

昭ちゃん手伝って。あざみ……籠選んできてよ。

ききよう

配達は御主人にお願いしますよ。

家族2

普通はこんな時間にはやらないんですよ。特別ですからね、お客さん。

と、家族三人、店の方に消えていた。

幸一

どうしてお前が……。

ききよう

これは俺の夢だ……誰かに起こされるまでは、こうして毎晩、お前に百合の花のキユーピットを頼みにくるさ。今度こそ忘れるなよ。誰にお前が依頼されたのか。お前は誰に使われているのかを。

幸一

どういふことなんだ！

しかし、ききようは消えている。

家族2、花かごを持って現れる。

家族2

はい、これ、ここに住所が書いてあるから。

幸一、花かごを持って立ちつくす。

家族3

パパ、帰ってきてよ。必ずよ。

家族1

何言ってるんだよあざみ、すぐ近所だよ。

家族3

なんだか、変な気になったの。パパがもう帰ってこないような。変な気持ち……。

片手のりんごを見つめながら、

幸一

何が恩返しだ！殺せば良かったあんな昆虫。

幸一りんごを捨てて花かごを抱えて飛び出していく。

りんごを拾ってまたかじるあざみ。

元の百合子の家、ドアをノックする幸一。

ききょうは花として、元の床に咲いている。

やはり鍵はかかっていない、そっと入る幸一。

幸一　こんなことをくり返して、俺は何をしようとしているんだ。

とテーブルの上に花かごを置く。オランダ製のヒツギが開いて、中から老婆が現われる。新しかったはずのヒツギが古びてホコリがかかっていた。

幸一　サ、サインをお願いします。

老婆　ずいぶん遅かったのねえ……今まで何をしていたの？

幸一　あなたは……。

と、老婆を見つめる。

幸一　百合子さん……。

老婆　幸一さん。……待ちました。待っていましたあれからずっと。今度は私がききようになつてしまうかと思つたくらい。

辺りに蝶が飛び交う。

幸一

でかい蝶だなあ……。

老婆

あれから沢山繁殖しちゃって……。あの時、あなたが殺さなかったから……。

幸一

萩原さんは？

老婆

死にました……。とうとう働かず、考えながら死にました……。あれからまた百年……

……こんなことなら、あの時、起こさずにいてほしかった。夫婦の暮らしをしようにも……。キリキリ働きたくたって……。こんなしなびた体では……。幸一さん……。私はあなたに好かれなくても生きていけると言いましたよね。私が好きなら、それでいいのだと……。でもあれは間違いだということに今頃気付いてしまいました。こちらが好きであれば良いと思いつめるのは、自分にそれだけの自信がある時だけなんです。対等か、それ以上の力がこちらにある時だけなんです。自分が優位に立っていることが判つていればこそ、あんな風に思えたんですね。

十八の私が、三十のあなたに、若さでも、容姿でも勝っていると感じていたから、だからあんな風に強引になれた。待つてみて判りました。愛されていたならば……。少しでもあなたに好いて貰えたならば……。そうしたならば、きっと、そんな自信が、長い時間をささえてくれたに違いないって。

幸一

おれは本当に、花キューピットを配達しただけなんです。初めてあなたに会った時、美しい人だと思いました。愛そうかとも思いました。けれど何が、何がそれを引き止めたんです。

老婆

でも、あたし、やっぱりあなたの妻なんですよ。



2002年宇宙堂試演公演より
幸一を待っていた百合子（杉嶋美智子・右）と萩原（土屋良太・中央）

と、突然七つのベッドに寝ていた七人の使用人が起きあがる。

七人 嫁入り道具も買ったのに。今じゃススけて蔵の中。起こした責任どうするの！

と、またもぐる。

老婆 もうすぐこの部屋も、使用人だけの部屋になってしまうのね。やっとあなたに会え

たけど、私はもう……死んでしまおうでしょう……。

と、ドアがあいて萩原が現われる。

幸一 あ！

萩原 あ！

幸一 萩原さん、死んだんじゃあ……。

老婆 あの時の子ですよ、あなたの子……。

幸一 ええ？

萩原 お帰りなさい……山野さんですね？百年ぶりです。お待ちしておりましたよ。母さんはあれからずいぶん、あなたの子供を孕みました。あの時、父さんがオシベの黄

色を全部とらずに出ていったからですよ。でもみんな、みんな昆虫に食われてしま
って……ここで元気なのは、このききようだけ……。

と、風が吹く。

幸一、ききようの花を折ろうとする。

萩原

あ！何をするんです！それは、それだけは……。

幸一、折り切る。と、また例のききようが現われる。

ききよう

眠っていたよ……百合子さんのお茶のせいだ……。

老婆、おびえる。

萩原

父さん、どうしてききようを折るんです？こんなにたたられても、こりないなんて
いけない人だ、あんた。いけないことをする、いけない親だ。

幸一

ないはずのものをしているのが苦しいのさ。あるべきものを見ていたい。

萩原

あるべきものって何なんです。

幸一

地道な生活さ。

きぎよう

幸一

君がいくら抵抗したって、私はちゃんとここにいるのさ。
おれの代わりに眠っていたんだろ？俺があの時、毒りんごのお茶を飲んでいたら、この人と、眠りながら花屋の日常を営んでいたはずなんだろう？そして目覚めることもなく、花屋の親父として惜しまれて死んでいっただろう。お前はおれの暮らしに毒を注いで、自分の夢をかなえたかった。この百合子さんの生活を盗んで、おれの眠りを眠ったんだ。あれからどれくらい経ったのか、おれは知らない。たった一日の出来事かと思うと、百年だったり、二十年だったり、おれの意志とは関係なしに、別の誰かの時間が主軸になって動いているようだ。

きぎよう

幸一

あんたは花キューピットを配達していきやそれでいいんだよ。あんたはただの花屋なんだから。

きぎよう

幸一

ただの花屋がなんでこんな目にあうんだ。
どんな目に？

きぎよう

こんなだよ！こんな！
君はただ、日々の暮らしを暮しているだけだと思いがね。頼まれたものを届ける暮らしだ。

と、萩原、苦しそうにうずくまる。

幸一

どうした、萩原さん……。

萩原 私は萩原じゃないよ、山野だよ、山野さん。あんたの息子なんだから……。
幸一 そんなはずはない……。
萩原 あの時の花粉で母さんが生んだんだ。山野さんの花粉だよ。
幸一 俺は花じゃない、花屋だぞ。
萩原 山野さんの夢精が花粉にからんだのさ。
幸一 よせよ、子供じゃないんだから。
萩原 大人の夢精だよ。だから孕んだんじゃないか……。

と苦しそう。

幸一 大丈夫か？
萩原 だめだ……。寿命だ……。
百合子 富夫……。
萩原 母さん、さようなら。また、次の季節に……。
百合子 みんな、みんな、親よりも先に逝ってしまう。

飛んでいた蝶が萩原の体に止まる。
そして、おおいかくして食べてしまう。

幸一　なんだよお前は、チョーチョだろ？何で死体を食べっちゃうんだよ。
蝶　昆虫ですから。

幸一　あ、お前あの青虫の子孫だな。お前のせいでヘンテコになったんだ。どうしてくれるんだ、

蝶　どうしま蝶！

幸一　バカ者！

ききよう　百合子さん、やっと一緒になれますね。待ったかいはありました。
百合子　判らない人ね。私はもう幸一さんの妻なのですよ。

ききよう　百年ですよ。百合子さん。こいつにはちゃんと別の暮らしがあるんです。あなたを待っていたのは、この僕、一人きりなんです。

百合子　でも、私は、あなたなんか忘れていた。

ききよう　忘れるはずはありません。こうして、ここで、一緒に暮らしていたではありませんか……いつも僕は、ここにこうして立ち、あなたの生活の一部始終を見てきたんですから。

百合子　ここにあつたのはききようの花です。私はそれを、ただ壁紙を見るように、見てきただけです。あるんだから置いておきましょうというような、役たたずの家具みたいに。ききようは咲いていたんです。

ききよう　それが夫婦の暮しでしょう。

百合子　幸一さん。なんとか言つて下さい。この人を拒もうにも、もう体がうまく動かない。

幸一

ききよう君、年寄りいじめはいけないよ。この人にはもう先がないんだから好きにさせなさい。

ききよう

あんたが面倒みるっていうの？

幸一

仕方ないだろう。責任あるみたいだし。

百合子

責任とるだけ？愛しては下さらないの？

幸一

んんんん……

百合子

あたしが百歳の老婆だから？

幸一

んんんん……

百合子

嫌だなあ……愛されないまま死んでいくの。

幸一

だいたいね、愛するの、愛されるのって、一体何なんです？どうすればいい訳ですかね？おれにはそれが判らない。初めてここに来た時から、愛だの、恋だの、言葉

だけが飛び交ってるけど、俺が「愛してますっ！」て一言言えば、済んじやうことなんですかね。

百合子

済みますとも、その言葉にいつわりがなければ。

ききよう

こんな奴に百合子さんが愛せるはずありませんよ。死にかけて婆さんのなぐさめに、

嘘の言葉を言っちゃおうなんて考えてる奴に。

百合子

そうなんですか？

幸一

俺は、あなたを知らない。あなたに会ってから百年経ったと言われても、あなたの癖や、あなたの仕草、そしてあなたの生活、あなたという人のディテールを、俺は

百合子

ききよう

少しも知らないんだ。知らない人をどうして愛せる。無駄にしたのね百年も。

僕は知ってる。知り過ぎてても変わらない、僕の愛情は。思われることは疲れることだどあなたは言った。けれど、あなたは、俺に見つめられて輝き、熟し、この愛に甘え、ささえられて生きてきたのさ。これから先、追いかける僕が消えてしまったら、あなたは、なえてしまうだろう。僕はあなたのためにあるということをもう知っててもいい頃だぜ。

百合子

ききよう

あたしはもうこんな歳です。あんたが追いかけても逃げ切れぬ。こんな体です。こんな体を愛せるはずがない。

愛せますとも。何百歳になろうと、「かわらぬ愛」のききようです。あなたが生きるためならば、これから何度でも花を送り、あなたを目覚めさせながら、僕も生きていきたい。

百合子

ききよう

この百合の花を送ったのは、あんたなの。そうですとも。

歩けなかつたくせに。

ききよう

夢の力ですよ。夢は随分と遠くまで出歩けるんです。けれど、しよせん花の夢です。

花屋の夢にしか届かない。小さな宇宙の夢なんです。

おれの夢につないだというのか？

ききよう

幸一

ああ、毒りんごのパイプでね。かじったりんごの数だけ、そのパイプは太くなるの

さ。

幸一

かじったのは昭次だ。ないものをあると信じるその癖は弟の癖なんだ。

きぎよう

その弟は今どこに？

幸一

え？（と気分が悪くなる）

きぎよう

どうした？

幸一、隅に行って吐きはじめる。

きぎよう

弟はどこにいと聞いてるんだよ。

幸一、吐いても吐いても吐き切れない。

きぎよう

吐こうとしたって簡単には吐き出せないのさ、そのりんごはね。ないりんごをかじり続けたつげは高いさ。

幸一

……ここはりんごの中なのか？……昭次は……昭次はその外側にいるんだろうか？

百合子

どうしたの？幸一さん、二日酔いなの？（と、背中をさする）

きぎよう

その男にさわるんじゃない。百合子さんこっちにおいで。

と、無理矢理引き寄せろ。

きぎよう

ひび割れた唇も、傷のように深いシワも、薄く、縮れた灰色の髪も、臭い息も、腐った体臭も、みんなみんな僕のものだ。僕にしから愛せない。僕だけの体なんだ。

百合子

きぎよう

あんた変態じゃないの？ 一八歳の老人を犯そうというの？
あいつに抱かれようとしたくせに。

百合子

あんた狂ってる。四百年前からそうだった。あたしを本当に愛しているなら、こんな目にあわせるはずがない。あんたのはただの執着だわ。あたしを手に入れてどうしたいの。いたぶって苦めたいの？

きぎよう

めでののさ。あの時は俺の方が、五つばかり年上だった。大切にしたらろう？ 君のわがままは何でも聞いてやった。生類あわれみの令が施行されてからだって、君の嫌いな隣のシロをブチ殺してやったじゃないか。今だって同じさ。入れ歯も洗ってやるし、オシメだって変えてあげる。風呂にも入れてやるし、ウンチをぬぐってやるのもいい。

と、百合子の顔を引き寄せ、自分の胸に押しつける。

百合子

あんたの胸ツルツルしている。若いんだわねえ。

きぎよう

眠っていたからねえ。あの時のままさ。

百合子

くそう。……若さに惹かれそうな自分が怖い。

と、ドアが開いて蓮見なずなが現われる。

なずな

くそう。……若さに惹かれそうな自分が怖い。

幸一

なずなさん……でしたよね？

なずな

何言ってるのよ。探したわ。あなた。配達に行ったきり帰って来ないんだもの。

幸一

え？

なずな

この家、なんだか一度来たことがあるみたいなのがするわ。そんなはずないわよね

幸一

え。でも、昔、いつだったか……デブかしら……。

幸一

デブ？

なずな

デブって言うんじゃないか？こういう感じ。

幸一

デジャブだろ？

なずな

あ！？嫌だわ。

と、白い服にカサブランカの花粉がついた。ききようと百合子は消えている。

なずな

取れないのよね。これ。あなた、ちゃんと取らなかったんじゃない？

幸一

つぼみが咲いたんだよ。

なずな

幸一

カサブランカ……そうよ、あなた、あたし達ここで初めて会ったんじゃない。ええ？

なずな

幸一

人妻だったあたしに言い寄ってプロポーズしたの、この部屋じゃなかったかしら？ 言い寄ったのは土栗君だろう？ 医者と別れて一緒になる気だったんだらう？

なずな

幸一

土栗？ 忘れたわそんな人。とにかくあんたと一緒になったんだから。 どうして俺となずなさんが？

なずな

幸一

あなたに相談があるの……あたし弟が、あの紫苑が怖いよ。 紫苑？

なずな

昭ちゃんよ。 医者と別れてからもずっとあたしから離れないあの紫苑よ。 シオンなんて少女漫画の美少年みたいな名前のくせに、ねばっこい目で私を見るでしょ？ あなたどうして一緒に暮してもいいなんて言ったの？ あなたが昭次なんて呼ぶから、あの子あなたの本当の弟のつもりになってるわよ。 あなた言ったじゃない、あの子は私が好きなんじゃなくて、私との関係が好きなんだって。 言つてよあなた。 お前は俺の弟じゃないって。 出てってもらいましょう。 ね、赤の他人なんだもの。 気味が悪いわ。

幸一、また吐きそうになる。

なずな

どうしたの？ あなた。

幸一
なずな

言ってることが判らないんだ。
……ごめんなさい。疑ってるんでしょ？あたしと紫苑のこと……恐いのよ。このままだとあたし。自信がありません。あんな若い目でキラキラ見つめられると、なんだかあたし、変な気になつてきて、ごめんなさいあなた。若いっていつてももう四十過ぎてるのよね、あの子、それなのに結婚もしないで、若い女の子に全然興味示さないんだもの、変よ、あの子は。誰かを好きになつてもらいたいわ。男でもいいから。

幸一
なずな

俺はどうしてあんたと一緒になつたんだ。
いやねえ、好きだったんでしょ？今時擦れてないところがいいとか、真つすぐな性格で、創造力が貧しいから扱いやすいとか色々ほめてたくせに。なずなの花言葉知ってる？

幸一
なずな

「あなたにすべて捧げます」
その通りよ。あなたにすべて捧げます。

幸一
なずな

……どうして知ってるんだ花言葉なんか……。
あなた花屋なんだから。花屋は花言葉ぐらい知つてないと商売できないって勉強してたじゃない。ねえ、紫苑の花言葉ってなんだっけ？

幸一
なずな

「あなたを忘れない」……あれえ……どうして知つてんだ……。
忘れてほしいわ。

と、目覚まし時計が鳴ってベッドから土栗が一人起きる。

土栗

あれ？

なずな

あなたは……。

土栗

土栗ですけど……あなたは？

なずな

どこかでお会いしましたね。

土栗

いいえ。

幸一

君は、何の土栗君なんだ？

土栗

植木職人ですけど。

幸一

こいつじゃないか！あんたが追っかけてたの。

なずな

ええ？

幸一

東京駅で待ち合わせて駆け落ちしようとした奴だよ。

なずな

思い出せないわ。あなたいくつ？

土栗

二十八です。

なずな

やだあなた、あたしもう五十ですよ。いくらなんでもこんな若僧と。

土栗

待てよ、記憶の遺伝子をたどってみると、あなたは蓮見なずなさんじゃありません

か？

なずな

蓮見は昔の名、今は山野です。

土栗

蓮の花言葉そのままに、過ぎ去った愛のあなたですね。

なずな
え？

土栗
すべてあなたに捧げますと言ったその口を、今度はそいつに重ねたんですね？

なずな
失礼な、あたし固いのよ！

土栗
筋肉が？

なずな
身持ち！

土栗
しかし僕だって昔々に捧げられた記憶が残ってますけどね。

なずな
私にはありませんそんな記憶。あなた、なんとかおっしやって！

幸一
俺にとつては一時間ほど前の記憶がなあ。

土栗
(なずなの耳にささやく)奥さん、退屈なんですよ？毎日毎日花売ってて、起きて、御飯作って、寝るだけの暮しでしょう？刺激欲しいんじゃないの？僕好きだなあ…

…奥さんのタイプ？

なずな
くそう…若さに惹かれそうな自分が怖い。

と、隣室より百合子とききよう、先の姿勢のまま現る。

百合子
くそう…若さに惹かれそうな自分が怖い。

ききよう
スベスベ、ツルツル、サラサラ。

百合子
くそう……。

と、萩原も登場。

萩原

お母ちゃん、だめだよ、純潔の白百合が不倫なんかいたしちやあ！

と、どうも赤ん坊のようである。

幸一

萩原さん、あんたさつき死んだんじゃあ……。

萩原

あつ！お父ちゃん！お母ちゃんが、お母ちゃんが、若い男に傾きそうだぜ！

幸一

また生まれたのか？あんた。

萩原

うん、ついさつき。だからその黄色とつちまえて言ったろ！

百合子

こんな老いた体でも生理の血だけは止まらなくて、さつきあなたが帰ってきた時、

萩原

俺はもう生まれたくないんだつ！木こりのできない世の中に生まれたって仕方が

ないんだつ！木を切り倒す夢を見ながら死に続けていたいんだい！お父ちゃん、それ、全部取ってね！その黄色。黄色の色は、生まれたくない子供らの危険信号なんだ。生まれても育たない子らと、産んでもらいたくない子らのね。危険、危険、と黄色く点滅している。黄信号なんだ。あつ！また咲いた。ぜえんぶ取ってね。お父ちゃん。

幸一

うるさいガキだな。

なずな

あなた。この子お父ちゃんって言ったわね。

萩原

誰？このオバサン。

なずな

山野の家内です。

百合子

え？

きぎよう

言ったら？別な暮らしだ。

なずな

あなた、こんな子供をよそでこさえてたの？

百合子

よそは、あなたの方です。ここが幸一さんの家なんです。

なずな

あなたは？

百合子

家内です。

なずな

あなたまさか、こんなばあさんと……。

土栗

いいじゃないですか、奥さん。

「ばら、ゆり、はと、太陽

昔はそれらにうっとりした

だがもう今は お前だけ

小さな 可愛い 清らかな

愛の泉よ ああ おまえこそ

ばら、ゆり、はと、太陽」

なずな

何それ、

土栗

ハイネです。

なずな

植木職人がどうしてハイネを？

土栗

恋する者は誰でも詩人です。

なずな

まあ……。

萩原

オバサン、気を付けな。こいつ誰にでもこうだぜ。

土栗

ひっこんでろ！

なずな

もつと言つて、何かもつと。

土栗

「あなたは不思議な仙丹を魂の壺にくゆらせて」……高村光太郎。

なずな

まあ……。

土栗

「仲良きことは美しきかな」武者小路実篤……。

なずな

まあ……。

土栗

「抱きしめたい、抱きしめたい、抱きしめたい、抱きしめたい」阿久悠。

なずな

まあ、まあ、まあ。

土栗

「可哀想だなんて言つたつて古い枝を刈り込まないと、新芽は出てこない」土栗。

なずな

まあ、あたし、あなたに全てを捧げますう。

と、抱き合う二人に突如、ホースで水をかけた人がいた。消防士登場。

消防士

消してやる！恋の炎を！

と、逃げまどう土栗となずなを水で追う。

なずな

おやめになつて、シオンさん！春とは言つても、まだ肌寒い日々。まだ、十二月の
ような気温なのにい。

消防士

きな臭いニオイを嗅ぎつけてきたら、この有り様。いいんですか？兄さん。兄さん、
いいんですか。

幸一

シオン君、落ち着きなさい。
僕は昭次です。弟の昭次ですよ、兄さん。

なずな

ハックシヨン！

土栗

なずなさん、早くこれに着替えて。風邪ひきますよ。

と、ベッドの下から着替えを出す。

なずな

ありがとう。

と、受け取ると、

消防士

まだ消えんかあ！

と、また水をかける。

なずな

怒るわよ！

消防士

あなたと他人になりたくないんです！

なずな

とつくに他人よ。言つてやつてあなた！

幸一

シオン君、君は、おれの弟じゃありませんよ。

消防士

何言つてんの兄さん。

幸一

本当だ、弟の昭次は君じゃない。弟は……おれの弟は……。

ききよう

弟なんか始めからいらないと言つてやれ！

幸一

い、いるさ。昭次は、昭次は、登校拒否の、気の弱い……だけど優しい弟だ……。

ききよう

どこにいるんだそんな弟。

幸一

学校さ、いや学校に行く途中の立橋の下の河原にしゃがんでるんだ……。

ききよう

おまえの弟は、まだ中学生なのか？

幸一

そうだ……中学二年生。奥手だから……声変わりもまだだし、時々オネシヨもしや

がるしよのない弟さ。だからシオン君、君はおれの弟じゃない。

消防士

弟だよ。昭次だよ、忘れちゃったのかい？この人は義姉さんだ……僕の永遠の義姉

さんなんだぜ。どうして兄さんそんなことを言うんだよ。

土栗、ドラム缶のようなものを持ってきて火を燃やしはじめていた。

土栗
なずな
消防士

さあ、なずなさんこっちであつたまろう。このままじゃ凍死しちゃうよ。
ありがとう土栗さん。
僕の目の前で火を火を！

と興奮する。

消防士

僕に火を見せるな！

幸一

どうした紫苑君……。

消防士

どうして僕が消防士になつたのか、まだ兄さんに言つてませんでしたね。

幸一

事情つて奴かい？

消防士

好きなんですよ、すつごーく、火つて奴がね。

幸一

え？

消防士

本当はケチな奴が奉仕活動やつたり、万引き癖のある奴が警官になつたりするの知つてます？コンプレックスの裏返しですよ。これじゃあいかん、いかんと思つても直りようもない癖直すために自分を縛つてね、こうありたいと願う姿に身を置いて、本心をかくす訳。かくしているうちに、消えるだろうつて。本心殺して、理想の自分を探すわけ。女つたらしは淡泊だつて言うじゃない。あれよあれ、見栄張りたいのよ。

幸一
消防士

じゃあ、君もしかして、放火魔だったとか？

シッ！僕が通った小学校も高校もみんな丸焼けになったの知ってる？小さい頃、火遊びしてて家の納屋一つ丸ごと焼いてから、もう、火を見るといても立ってもいられなくなるの。下半身がムズムズしてくるの。おもしろいんだよ。おもしろいのあるものがなくなるのって、おもしろいの。どんな高いものも、大きなものも、金のかかったものも、大事なものも、二つとないものも、火をつければ灰になるんだよ。あああ……火は動く、火は走る、こだわりも、しがらみもみんな焼きつくして走る。走る、走る。

幸一

ひ、人が変わっている。

消防士がドラム缶をひっくり返し、ドアロやベッドに火のついた、たき木を放り投げ出す。

幸一
消防士

や、やめろ！やめるんだ！

おれに火を見せたのが悪いんだあ！

とあばれる。

ききよう

燃えてる、燃えてる、火事ですなあ……。

百合子

何、呑気なこと言ってるの！

オランダ製のヒツギがまた開いて別な老女が顔を出す。

老女

火事やて？あらホンマ！ハハハハ、昼寝してたら火事になってるなんて、おもしろいハハハハ。

幸一

こんな時に何なんだ！

老女

あら幸ちゃん、お帰りなさい。

幸一

えええ？

百合子

言い忘れてたけど、あの人あれからずっとここにいたのよ。幸一さんのいいなずけって言い張って。丈夫よ、この人。

幸一

ボタンちゃんかい？

老女

そやかて京都にはもう帰れなかつたんだもん。親に内緒で家出したから。

なずな

何この人？

老女

幸ちゃんの家内ですう。

萩原

お父ちゃん、三人も妻を抱えて、これからどうするの？

幸一

知らんわい！

と、焼け落ちる家。

きぎよう

消防士

消防士を呼べ！一一九番だ！

もうここに来てるんだよ。ハハハ。

土栗、走って出て行く。

なずな

土栗

土栗さん、あたしを置いてどこ行くの？

俳優座大道具の兄さんと呼んでくるんだよ！

幸一

あああ！

と、蝶が飛んでくる。

幸一

なんだよ。

蝶

恩返し！恩返し！

幸一

バカ者！

蝶

今度はほんとの恩返し。

幸一

ホントか？

蝶

嘘付いたら針、一本、二本、三本、四本、五本、六本、七本、八本……。

幸一

こんな時に数えるなよ。

蝶 五十本、五十一本、
幸一 千本だろ？千本
蝶 千本飲む。
幸一 早くしろ！

蝶、幸一を乗せて、床の穴から消える、逃げまどう人々。

辺りは山野生花店の居間が変わっている。

誰もいない部屋のこたつの上にロウソクのついたデコレーションケーキが置いてある。

幸一が戸を開ける。

幸一

ただいま。

と、壁のカレンダーに目をやる。

幸一

一九九二年三月三日。

と、ホッとする。

幸一 昆虫め、やっとほんとの恩返しか……。

やかんがピーと鳴る。

幸一 なんだよ、親父も、オフクロもやかんかけっぱなしでどこ行ったんだ？ 昭次、昭次！

と、二階の方にも声をかけてみる。

幸一 誰もいないのか？

と、こたつに入って、テレビをつけようとして、「？」となる。

足に何かが当たったのだ、幸一、足にさわった異物を取り出してみる。それは、かじりかけの真っ赤なりんごであった。

幸一 これは……昭次の……。

とガラス戸がガラリと開いて、風呂あがりの妻が現れる。

幸一 ……。

ボタン
あら、あなた帰ってたの。

白いバスタオルで隠していた顔が見える。
ボタンである。

ボタン、鏡の前で化粧水をピチパチと顔につけはじめる。

ボタン
あまり遅いから先に入っちゃった。何してたの？こんなに遅くまで。

幸一
……昆虫め、今度はどんな恩返しだ。

ボタン
昆虫？あなた知ってたの？

幸一
え？

ボタン
昆虫は花の天敵だから、見つけたら潰せってあなた言ってたでしょう？お店のカサ
ブランカに青虫がついててね、潰そうと思ったんだけど、なんだか可哀想で、内緒
で私飼ってたのよ。そしたらホラ。

と、天井から大きなサナギが降りてくる。

ボタン
サナギになっちゃった。

サナギがニヤリと笑う。

幸一

貴様あ……。

ボタン

お願いあなた、蝶になるまでそつとときましようよ。この一匹だけ、ね。あなた
小学校の頃は、好きだったじゃない昆虫。夏休みには、山まで二人で出かけて、よ
く昆虫採集したわね。ホラ、いつだったか、たまたま一緒に行ったサッチャンが沢
に落ちたことがあったでしょう。ずい分、川下の方まで流されて、二人で走ったわ
ね、幸ちゃんが助けて、保健の先生におそわった人工呼吸してさ。幸ちゃんすごく
怒ったわね。サッチャンのこと、もう連れてこないって、言うことかかない奴は連
れてこないって。泣きながら怒ってた。幸ちゃんも男の子なんだなアって、私、そ
の時初めて思ったわ。体も弱かったし、体育も苦手だったし、幸ちゃんがあんなに
泳げるなんて、それまで知らなかったもの。あれで見直したのよ、あたし幸ちゃん
について行きたいって、子供心にも思ったなア、あたし。ケーキたべよか？火消し
て。

幸一

……。

ボタン

早く！

幸一

……。

ボタン

電気消そうね一応。

と、明かりを消す。

ボタン

おめでとう。早く消してよ。何てれてんのよ。ハッピーバースデー……早く、

幸一、ローソクの火を消す。

一瞬、真闇になる。

パチパチと手をたたく妻。妻が明かりをつけた。

妻

紅茶入れるわね。ケーキにビールじゃね。

と、ケーキを切りはじめた妻の顔は百合子に変わっている。

幸一

百合子さん……。

百合子

幸一さん、それ……。

幸一

え？

百合子

珍しいわね。おいしそうなりんご。

幸一

これが、見えるんですか？

百合子

やあねえ……ちよつと見せて。

と、幸一の手からりんごを受け取る。

百合子

ねえ、どうしてりんごって、花はあんなに白いのに、こんなに真っ赤な実ができるのかしら？りんごをかじると胸がキューンとしてこない？何だか、懐かしいような寂しいような、そんな気持ち。まるで、遠い昔の傷口にふれたみたいなの、古いかさぶたをはがしたみたいなのそんな気持ち。この赤は、やっぱり血の色なのね。生きているってあかしなのね。一口かじると、忘れていたたいせつなものを思い出すような気がするの、生きたものが、生きたものとふれ合うからなのね。

幸一

……。

百合子

かじってもいい？

幸一

え？

百合子

好きなのよ、この感じ。

幸一

百合子

え？

幸一

いつからここに？

と、りんごをかじる。

幸一

でも、俺は……。

と、百合子が苦しみはじめる。

幸一 どうしたの？百合子さん。百合子さん。

百合子は倒れ込み、眠りはじめる。

幸一 百合子さん！このりんごは……。

「毒のりんごよ」と声がする。振り向くと、あざみ色の着物姿のあざみが立っている。

幸一 昭次……。

あざみ 私の名はあざみよ。

幸一 このりんごは君のなのか。

あざみ そうよ。あたしのよ。

幸一 どうして……これは一体。

あざみ 復讐したのよ。その女に。幸一さんをあたしから奪った憎い女ですもの、そいつ。幸一さん。あたしのこと捨てちゃあいやよ。

幸一
あざみ

捨てるも拾うも、君なんか知らんぞ。
ずつと側にいるって約束したくせに。忘れたふりしないでよ。幸一さんは、私以外の女は愛せないのに、いつもそれを忘れていろんな花にまどわされるのね。でも許してあげる。時々迷い子になっても、いつもちゃんと帰ってきてくれるから。

と、百合子を背負おうとする。

幸一

百合子さんをどうするんだ。

あざみ

捨ててくるのよ。幸一さんも手伝って。

幸一

どこに行くんだ。

あざみ

停車場よ。林の中のジメジメしたきのこだらけのあの停車場。幸一さんはいろんなものをあそこに捨てるのよ。そしてすぐに忘れる。

幸一

停車場？

あざみ

でもね、あの停車場に列車が着いたのを見たことがないわ。幸一さん。あの停車場は、一体いつごろからあそこにあるの？

幸一

……。

あざみ

早く手伝って。

幸一

人を捨てたりできないさ。

あざみ

何を言ってるの。こんなしおれた花一輪に思いを残して花屋がつとまりますかって

の！あつ！

幸一
え？

あざみ
燃えてる。

幸一
え？

あざみ
ホラ、あそこ。燃えてるのはあの停車場よ。あそこが火事になるなんて……幸一さ

んの好きなものがみんな燃えちゃうね。

見えないよ。見えないよ、そんなもの。

あんなに燃えているのに？

あざみ
幸一

と、客の声。

客
こんばんわ、今晚わ。

幸一
もう閉店なんですけど

花キューピット頼みたいんです。

客

と、ズカズカ入ってきたのは黒コゲの客。

幸一
あんたは……。

客
百合の花かごを……。

客 幸一 閉店です。配達はいたしません。もうどこにもいいんだ、配達は……ここにある、これでいい。

と、眠る百合子を抱きあげる。

幸一 ききよう……。

客 ききようが百合に恋したところで、どうにもなるもんじゃありませんがね。一人寂しく野に咲く花は、大輪の夢が欲しいもので……もらって行くよ。今度こそ。

と、その背にかつぎあげる。

ふらつきもせず、りりしく立ち上がる雄々しいききよう。

幸一 俺は毎日、家の花屋の冷蔵庫で、好きな本を読んでいた。誰にも邪魔されず、一人

きりになれる場所といたら、そこしかなかったからだ。花々が長く生きのびれるように、どこの花屋にも取り付けてある冷蔵庫だ。いつもいろんな花が横たわっている。そんな眠る花々に囲まれながら、俺は仕事をさぼってしゃがみ込んだ。親父にどやしつけられるまで、いつまでもそこにいた。あれはいつだったろう……大輪のカサブランカの束の中に、小さなききようが一輪、茎に茎をからませて咲いていた。カサブランカがみんな売りつくされても、そのききようだけはいつまでも冷蔵

庫の中で、紫色に揺れていた。昭次が言った、兄ちゃん、このききよう丈夫だね？夏の花の百合は春の温室で育ったんでしょう？でもききようは秋の花だよね。もう世界の花に季節はないんだね。花に季節がないということは、花の時間はどうなるの？乱れた季節は、乱れた時間を生まないの？花屋は、そんな花の時間を生きてくの？

昭次、一人にしてくれよ。兄ちゃん、ここで本読んでんだ。おまえは学校行ってこい。大人の本だぞ。お前に読めない大人の本だ。

あざみ

兄ちゃん、このききよう、なんだか兄ちゃんに似ているね。いつまでも枯れずに一人つきりで、元気に咲いているのにさ。なんだかとても寂しそうなんだ。

幸一

なんでそれが兄ちゃんに似てんだよ。

あざみ

場違いなもの、季節外れなもの、自分でちゃんと知ってるくせにさ、咲かずにはいられないでいるみたいなの、そんなところ。そして何かを待っているみたいなの、誰かが気が付いてくれるのを待っているみたいなの。でも、売られずに済むんなら、それにこしたことはないなんて考えてるとかも。

幸一

お前に花の心が判るのかい？

あざみ

花屋の息子だもん。

幸一

花がきれいなものは、心が無いからなんだ。人知未踏の谷間の百合だつてきれいに咲いているものなんだ。誰かのためじゃない。

ただ、そこに生きてるだけだから、真からきれいでいられるんだぞ。言葉も心もな

いからさ。

あざみ

兄ちゃんとはもうつきあい切れないよ。僕はもう、一人でりんごの世界に入るんだなあ……兄ちゃんはやっぱりもうここには帰ってこないんだなあ……。

幸一

ここ？

あざみ

停車場だよ。今度は僕を捨てにきたんだろう？

幸一

昭次……。

あざみ

こんな闇夜の野原の中に行く時は、

客車の窓はみんな水族館の窓になる。

乾いた電信柱の列が

せわしく映っているらしい。

汽車は銀河系の玲瓏レンズ

巨きな水素のりんごの中を駆けている。

りんごの中を走っている。

けれどもここはいつたいていのこの停車場だ？

と、いつの間にか幸一の回りを花々が取り囲んでいた。

あざみは昭次の格好になっていた。

きぎよう

さあ、列車が着いた。乗るんだろ？幸一。

幸一 え？

ききよう りんごの中を走って行け！

サナギが巨大な列車に変わっていた。

サナギ 恩返し、恩返し。

幸一 三度目の正直か……。

昭次が真赤なりんごを放る。

うけとめる幸一。

ききよう りんごの中を突き抜ける！

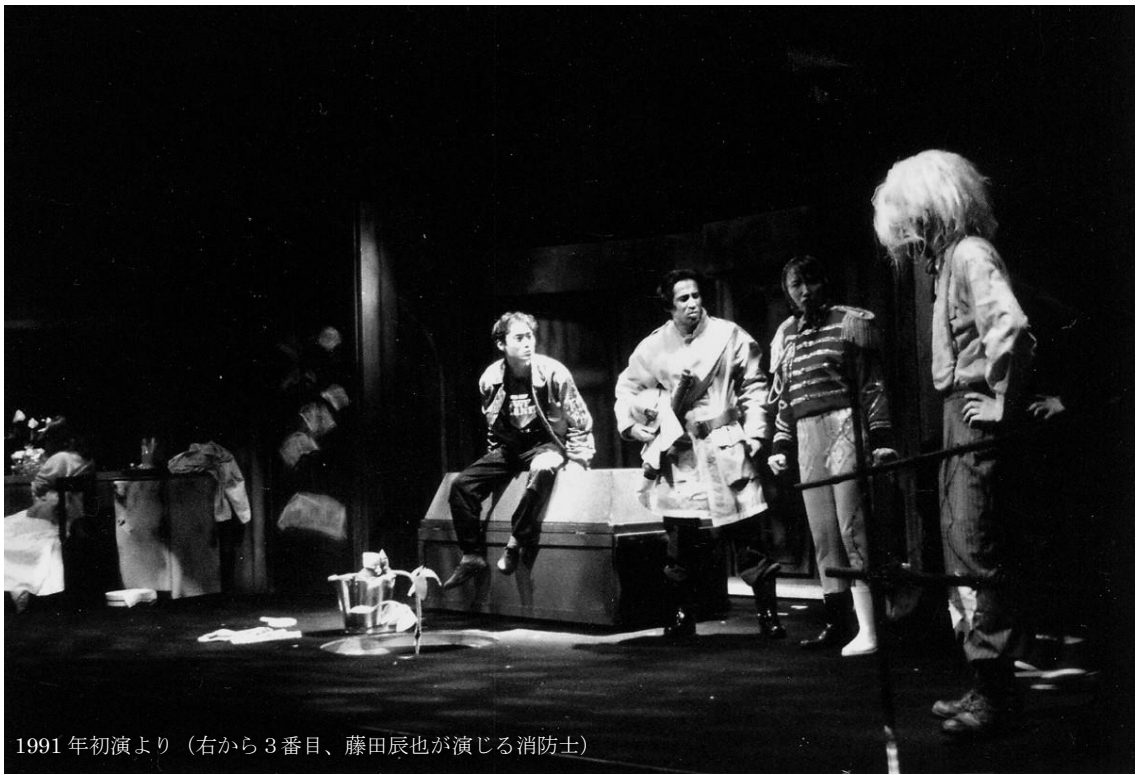
幸一、ガブリとりんごをかじった。

すべての世界が裏返しになっていく。

そして一つの別な地球に生まれ変わった。

ギーッとドアの開く音。

親父の声「幸一、又、こんなところで油売って、配達だ配達！幸一」



1991年初演より（右から3番目、藤田辰也が演じる消防士）

あとがき

「藤田辰也氏のこと」

渡辺えり

「花々の眠る部屋」は伊丹アイホールプロデュースで1991年に初演し、その後宇宙堂で2002年に再演した作品である。南河内万歳一座の俳優河野洋一郎氏の実家が花屋だったので河野氏に取材をしながら河野氏を主人公にして書きあげた作品だった。そして出だしにどうしても入れたかった宮澤賢治の「青森挽歌」の作曲を「万歳」の俳優で音楽家である藤田辰也氏に依頼した。「花々」の初演に消防士役で出演もして下さった。

「青森挽歌」は宮澤賢治が、死んでしまった愛する妹トシを探して樺太まで行った帰りの列車の中の風景を書いたと言われている。

赤くて丸い林檎の中に吸い込まれた世界。そこは死んだ者が住む永遠の世界でもある。

藤田氏の作曲が素晴らしかったので、震災の年に初演し、一昨年にも再演した「天使猫―宮澤賢治の生き方―」にそのまま使わせていただいた。藤田氏も快く承諾して下さいました。この歌をラストに歌う時、出演者一同がどうしても泣けてくる。そんな歌である。

一昨年兵庫県立芸術文化センターで「天使猫」を上演した際、藤田辰也氏が観に来て下さり、とても喜んでくれた。それがお会いする最後になってしまった。「来年も頑張ります」との笑顔が最後になりました。今は林檎の中に住む藤田辰也氏の美しいメロディーに塾生たちが触発されて面白い舞台を作ってくれると思う。歌う度に藤田氏の笑顔が甦る。

2016年4月

初演パンフレット・チラシ資料提供・伊丹アイホール

公演詳細

AI・HALLプロデュース2

「花々の眠る部屋」

作・渡辺えり子 (劇団300)

演出・内藤裕敬 (南河内万歳一座)

於・アイホール (一九九一年十一月)

花々の眠る部屋



1991年1月12日(THU) 伊丹
1991年1月17日(FRI) シブヤ
1991年1月21日(TUE) 赤武
1991年1月28日(SUN) 赤武

1991年初演チラシより
イラスト：山中里織

SEED
SHIBUYA SEIBU

作 毎石まゆみ
演出 内藤裕敬
監修 渡辺えり子
脚本 渡辺えり子
演出 内藤裕敬
音楽 武井健
美術 武井健
照明 武井健
音響 武井健
衣裳 武井健
メイク 武井健
ヘア 武井健
舞台監督 武井健
演出 内藤裕敬
監修 渡辺えり子
脚本 渡辺えり子
演出 内藤裕敬
音楽 武井健
美術 武井健
照明 武井健
音響 武井健
衣裳 武井健
メイク 武井健
ヘア 武井健
舞台監督 武井健

配役

山野幸一／河野洋一郎 (南河内万歳一座)

萩原／枯暮修 (劇団☆新感線)

消防士・家族1・紫苑／藤田辰也 (南河内万歳一座)

ぼたん・老女／岡田朝子 (南河内万歳一座)

昭次・家族3・あざみ／山下千景 (ブリキの自発団)

ききよう・客／武発史郎 (劇団300)

昆虫・蝶・サナギ／保井健 (南河内万歳一座)

百合子・老婆／田中容子

なずな・家族2／鴨鈴女 (南河内万歳一座)

土栗・七つ子の使用人／関秀人 (立身出世劇場)

酒防士・紫苑／藤田辰也 (南河内万歳一座)

ALHALLプロデュース2 花々の眠る部屋



1991/12/5 THU 8 SUN
伊丹アイホール

1992/1/17 FRI 21 TUE



◆土栗 (七つ子の使用人) 関 秀人 (立身出世劇場)

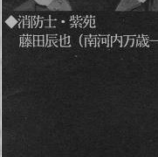
演出 内藤裕敬 (南河内万歳一座)



◆酒防士・紫苑 藤田辰也 (南河内万歳一座)



◆萩原富夫 (木こり) 枯暮 修 (劇団☆新感線)



◆消防士・紫苑 藤田辰也 (南河内万歳一座)



南河内万歳一座指古場にて立ち指古が始まる

◆山野幸一 (山野生花店・長男) 河野洋一郎 (南河内万歳一座)

◆昆虫 保井健 (南河内万歳一座)



記者会見 (AIホール) 1991・11・11



◆昭次 山下千景 (ブリキの自発団)



作 渡辺り子 (劇団300主宰)



◆百合子 田中容子



スタッフ

舞台監督／伊藤一乃

宣伝美術／森田高志

前川房枝 (扇町ミュージアムスクエア)

ブリキの自発団 立身出世劇場 小堀純 デザイン大陸 製作／津村卓 主催／伊丹市

照明／桐山元一

イラスト／山中里織

協力／扇町ミュージアムスクエア

製作／津村卓 主催／伊丹市

音効／藤田赤目

制作／AI・HALL

協力／扇町ミュージアムスクエア

製作／津村卓 主催／伊丹市

音響操作／堀美妃子

衣装／有吉麻美

小道具／高橋岳蔵

製作／津村卓 主催／伊丹市

衣裳／有吉麻美

小道具／高橋岳蔵

協力／扇町ミュージアムスクエア

製作／津村卓 主催／伊丹市

小道具／高橋岳蔵

協力／扇町ミュージアムスクエア

製作／津村卓 主催／伊丹市

製作／津村卓 主催／伊丹市

協力／扇町ミュージアムスクエア

製作／津村卓 主催／伊丹市

製作／津村卓 主催／伊丹市

製作／津村卓 主催／伊丹市

製作／津村卓 主催／伊丹市

製作／津村卓 主催／伊丹市

製作／津村卓 主催／伊丹市

製作／津村卓 主催／伊丹市

舞台監督	伊藤一乃
照明	桐山元一
衣装	有吉麻美
音響操作	堀美妃子
衣裳	有吉麻美
小道具	高橋岳蔵
宣伝美術	森田高志
イラスト	山中里織
制作	AI・HALL
協力	扇町ミュージアムスクエア
制作	立身出世劇場
制作	津村卓
制作	伊丹市

撮影 森田高志 松下安良 高本登子
演出 森田高志 協力 学生演劇会



SHIBUYA SEIBU

AI-HALL アイホール

宇宙堂新人試演公演「花々の眠る部屋」

日時：平成十四年（二〇〇二年）十二月二十七日〜十二月二十九日

於：梅ヶ丘BOX

作・監修：渡辺えり子

演出：土屋良太

キャスト：金子敦／坂本ひとみ／中野仁雅／稲津敬太／奥山隆／木村真弓／野笹由紀子／秦慎一郎

土屋良太／杉嶋美智子

演出部：有馬英樹／飯垣有 制作：宇宙堂



● 著作

渡辺えり

● 作成

渡辺流演劇塾 塾生

● 発行元

オフィス300

● 発行日

2016年4月21日

● 印刷

ちよ古つ都製本工房

● 協力

伊丹アイホール

南河内万歳一座

☆ この戯曲を上演する際は、オフィス300に御一報願います。

☆ オフィス300 TEL: 03-6804-4838

メールアドレス: mail@office300.co.jp